

美作国分寺跡発掘調査報告

1980

津山市教育委員会

美作国分寺跡発掘調査報告



1980

津山市教育委員会

美作国分寺跡創建瓦主要組合わせ

序

津山市は岡山県の北部に位置する四周を山々に囲まれた小盆地で、北に中国山地をひかえ、市の中央部を吉井川の清流が貫流する山紫水明の地である。この地は、遠く先土器時代から人間の足跡がみられ、弥生時代には人々の広範な定住が開始された。以来、美作の文化の中心に位置してきたのであるが、とくに、奈良時代には国府と国分寺が置かれ、政治と宗教の中核として、古代文化の繁栄を支えていた。

この美作国分寺跡が、宅地化の影響を受けて破壊の危機に直面し始めたのは、昭和40年代後半であった。本委員会では、つとに分布調査などの予備調査を行ない、他日の本格調査に備えていたのであるが、先の情勢に鑑み早急に指定保存のため寺域確認を急ぐ必要があった。幸いに国・県の補助金を得ることができ、昭和51年度から、当初3ヵ年、途中から4ヵ年計画に変更して発掘調査を実施した。その結果、中心伽藍の全容と寺域をほぼ確認することができ、所期の目的を達成するとともに、郷土史の一空白を埋め得たことは、ひそかに快事とするところである。この間、多くの市民が力強い支援を寄せられ、改めて文化財保護の重要さを痛感した次第である。今後は地権者、地元国分寺町内会などの協力を得て、保存と活用を図っていきたいと念願している。

最後に、終始調査を指導いただいた奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、岡山県文化財保護審議委員の先生方、岡山県教育委員会文化課、それに津山市文化財保護委員会、また、調査に理解と協力をいただいた地権者各位、地元国分寺町内会、さらには、調査の開始にあたって献身的な労をとられ、その過程で急逝された前国分寺住職田中孝円師に末筆ながら深甚の敬意を表する次第である。

昭和55年3月31日

津山市教育委員会

教育長 福島祐一

例　　言

1. 本書は津山市教育委員会が、国・県の補助金を得て実施した美作国分寺跡緊急発掘調査の報告書である。
 1. 調査は昭和51年度から昭和54年度まで、4次にわけて行なった。
 1. 本書に使用した方位は国土座標の方位であり、Nはその座標北を示す。これは、磁北に対して $N6^{\circ}30'32''E$ 、真北に対して $N10'W$ の偏倚角を有する。また、実測図に注記した座標は、国土座標のそれであり、X・Y軸とも一で、X軸は上3桁、Y軸は上2桁をそれぞれ省略した。例えば、X軸668は-105,668.00を示し、Y軸424は-26,424.00を示す。単位はmである。高さは海拔高である。
 1. 本書の執筆は、I、II、III、IV-1、Vを湊 哲夫、IV-2を行田裕美、IV-3を安川豊史が行なった。遺構の製図、遺物の実測・製図・写真撮影は上記湊、安川、行田が分担し、編集を湊が行なった。
 1. 本書の作成にあたっては、鎌木義昌、河本 清、近藤義郎、田中 琢、水内昌康5氏の指導を受けた。とくに田中琢氏からは本書の大部分について懇切かつ基礎的な指導・助言を得た。
 1. 本書Fig. 2に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図（津山東部）を複製したものである。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査の経過	5
1 調査に至る経過	5
2 調査体制	5
3 発掘経過	6
III 遺構	9
1 金堂	9
2 講堂	11
3 中門	12
4 回廊	13
5 塔	14
6 南門	15
7 北方建物	16
8 寺域を画する施設	16
9 その他の遺構	17
10 国分寺廃絶後の遺構・その他のトレンチ	17
11 小結	19
IV 遺物	21
1 瓦塼	21
2 土器	32
3 その他の遺物	35
V 結語	38

図面目次

PLAN. 1	周辺地形図
2	伽藍配置図
3	金堂全体図
4	金堂基壇東辺、北・東雨落溝、回廊入隅部
5	金堂基壇北辺(T-16)・基壇南辺(T-25)
6	講堂全体図
7	講堂基壇東辺
8	中門・中世柱穴群
9	中門基壇東北隅と回廊入隅部(T-24)
10	南門全体図
11	南門基壇南辺
12	回廊・塔・寺域を画する溝
13	北方建物・その他

図版目次

Pl. 1	国分寺跡・国分尼寺跡周辺航空写真
2	国分寺跡航空写真
3	金堂基壇東北隅(T-12・13、北から)
4-1	金堂北・東雨落溝(T-13、東から)
4-2	金堂基壇東辺と回廊部(T-12、西から)
5-1	金堂北雨落溝(T-17、東から)
5-2	金堂基壇北辺(T-16、南から)
5-3	" " 南辺(T-18、北から)
5-4	" " "(T-25、北から)
6-1	講堂基壇東辺(T-3、東から)
6-2	" " 北辺(T-7、南から)
7-1	" " 西辺(T-5、東から)
7-2	" " 南辺(T-6、南から)
8-1	中門基壇東北隅と回廊入隅部(T-24、北から)

- PL. 8-2 中門基壇東南隅 (T-27、南から)
 9-1 東面回廊基壇 (T-32、北から)
 9-2 塔東雨落溝 (T-31、西から)
 10-1 南門基壇 (T-9+10、西から)
 10-2 * * 東南隅 (T-23、南から)
 11-1 * 南雨落溝 (T-8、東から)
 11-2 * 瓦出土状況 (T-8)
 12-1 北方建物 (T-35、南から)
 12-2 寺域を画する溝 (T-32、西から)
 12-3 同溝土層断面 (南から)
 13-1 金堂基壇土 (T-1、北から)
 13-2 中門 * (T-26、東から)
 14-1 金堂礎石抜取痕 (T-12)
 14-2 南門 * * (T-9、北から)
 14-3 * * * (T-9、北から)
 15-1 柱穴群 (T-19、東から)
 15-2 * (T-20、北から)
 15-3 柱根 (T-19)
 15-4 土坑 (T-3)
 16 軒丸瓦 (I-a, I-b, II-a)
 17 * (II-b, III, IV)
 18 軒平瓦 (I-a, I-b)
 19 * (I-c, I-e, II)
 20 * (I-d, III, IV, V, VI, VII)
 21 九瓦 (A, B, C, D)
 22 平瓦 (繩叩き目)
 23 * (平行叩き目)
 24 * (格子叩き目・無文)
 25 隅切瓦・鬼瓦・埴
 26 上器
 27 上器
 28 軒丸瓦 (I-a, I-b, II-a, II-b, III, V)
 29 * (I-a, I-b, II-a, III, IV, V)

PL. 30	軒平瓦 (I-a、I-b、I-c、I-d、I-e、II、IV、V、VI、VII)
31	" (I-a、I-e、II)
32	丸 瓦 (A、B、C、D)
33	平 瓦 (繩叩き目)
34	" (平行叩き目)
35	" (格子叩き目・無文)
36	隅切瓦、鬼瓦、堵
37	土 器
38	陶磁器、墨書き器、鏡、鉄釘、石帶

挿 図 目 次

Fig. 1	美作国分寺跡位置図.....	1
2	周辺主要遺跡分布図.....	2
3	金堂基壇土 (T-15東壁断面).....	10
4	金堂礎石の据付けと基壇築成 (T-12西壁断面)	10
5	中門・回廊基壇土 (T-26北壁断面)	12
6	南面回廊基壇断面 (T-24東壁断面)	13
7	北面回廊基壇入隅部 (T-12)	14
8	伽藍配置概念図.....	20
9	軒丸瓦 V型式.....	22
10	平瓦繩叩き目型式 C	27
11	八稜鏡.....	35
12	石 帯.....	36

表 目 次

Tab. 1	軒丸瓦計測表.....	23
2	軒平瓦計測表.....	25
3	堵の厚さ.....	29
4	軒瓦の型式別分布.....	30
5	美作国分寺跡出土瓦との同範関係.....	31

I 位置と環境

美作国分寺跡は、岡山県津山市国分寺296番地他、吉井川と加茂川との合流点の東南東約1.7kmにある。津山市は岡山県東北部、旧美作国のほぼ中心に位置する(Fig. 1)。美作国は中国山地から派生する標高300mから120mほどの低丘陵と大小の河川流域に発達した沖積低地から構成される。東は杉坂峠を経て播磨に、北は物見・人形・四十曲などの諸峠を経て因幡・伯耆に、南は吉井川・旭川の水運を利用して吉備中枢部につながる。その歴史は原始以来、これら3方向からたえず影響を被りながら、形成されてきたといえる。国分寺跡は、美作国の中央やや東よりにあり、旧勝田郡の西端に位置する。この周辺では、中国山地から南に派生する標高200mから120mほどの低丘陵が、加茂川と広戸川にはまれつつ、吉井川と加茂川との合流点に向かって張り出している。その先端部は、日上歌山古墳群(Fig. 2-25)の分布する標高126mの独立丘を形成する。この独立丘と東約1.6kmの標高179mの觀音山を中心とする山塊との間に、標高100m前後の平坦な台地地形となる。国分寺跡は、この台地の東端部にあり、一帯は良好な水田地帯となっている。寺域付近では、東限で標高110m、西限で104.5m、南限で106.5m、北限で109mとなり、東から西へ、また北から南へ漸次下降する地形を呈する。国分寺跡の南には、津山市と櫛原町を画す急峻な山々がひびき、東には先の觀音山、西には吉井川を隔てて、横山の連山があり、北が加茂川流域の沖積低地となつてひらけている。

この地域には、北から、近長四ツ塚2号墳(Fig. 2-23)、高野山西正仙塚古墳(Fig. 2-22)、井口車塚古墳(Fig. 2-28)、川崎玉琳大塚古墳、日上天王山古墳(Fig. 2-26)などの前期から後期にかけての首長墓があり、また、国分寺推定寺域北限の北140mには、径35mの大型円墳・国分寺飯塚古墳(Fig. 2-27)が位置する。群小古墳においても、野村狐塚古墳群(9基)、櫛占塚

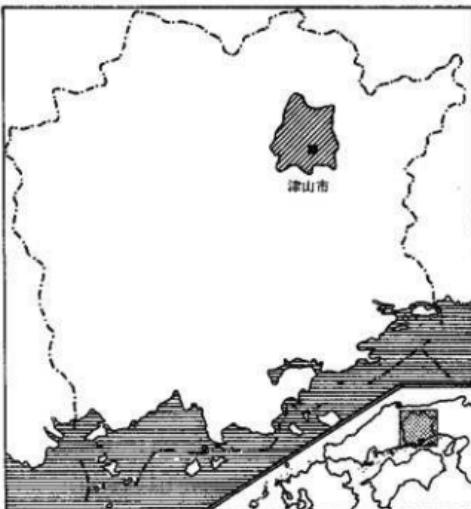


Fig. 1 美作国分寺跡位置図

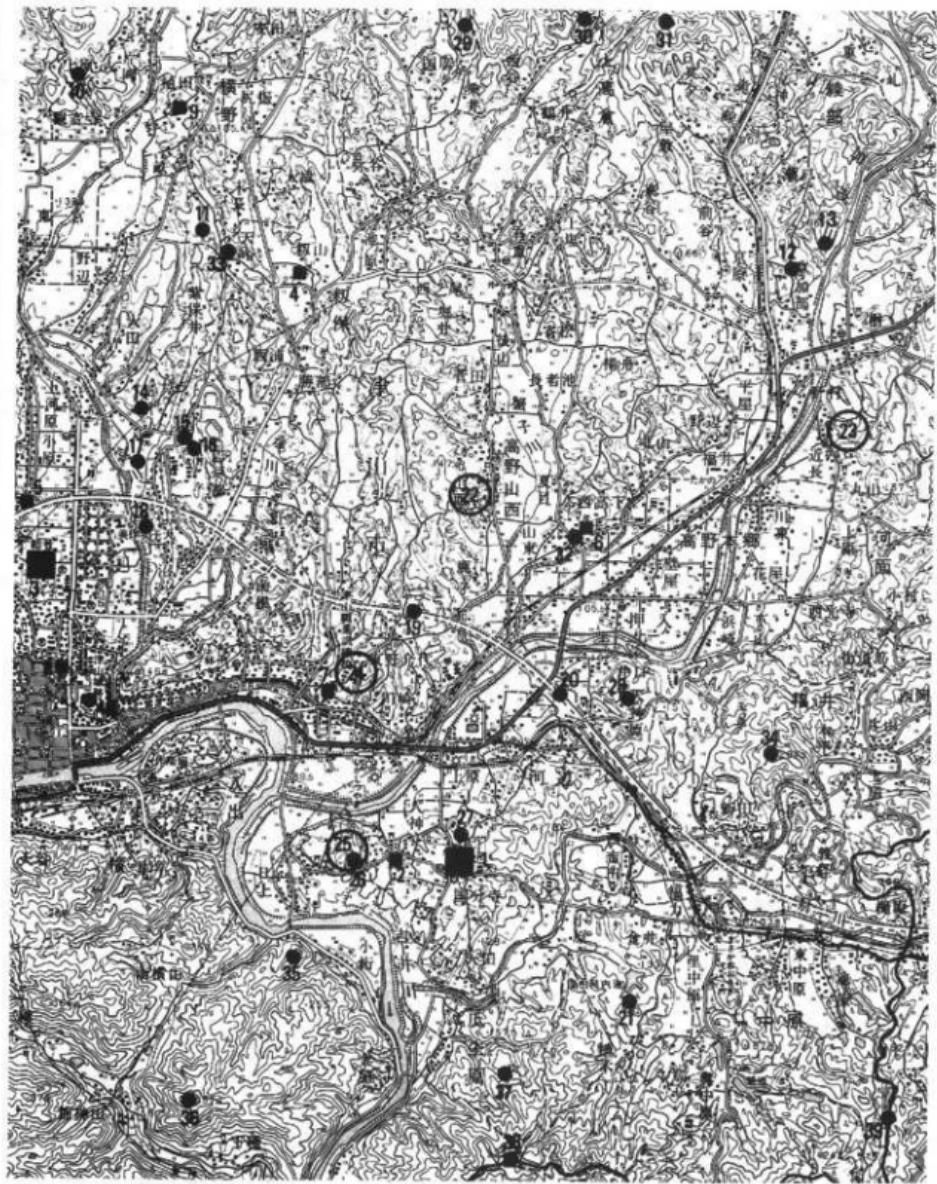


Fig. 2 周辺主要遺跡分布図 1:50,000

- | | | | |
|------------|--------------|----------------|-----------|
| 1. 美作国分寺跡 | 11. 紫保井遺跡 | 21. 金井別所遺跡 | 31. 鈴伏山城址 |
| 2. 美作國分尼寺跡 | 12. 草加郡東藏坊遺跡 | 22. 溝野山西正仙塚古墳群 | 32. 高野城址 |
| 3. 美作国府跡 | 13. 草加郡鰐込遺跡 | 23. 近長國ツ冢古墳群 | 33. 穂保塔城址 |
| 4. 穂保福田寺院跡 | 14. 大田十二社遺跡 | 24. 六ツ冢古墳群 | 34. 新宮城址 |
| 5. 幸運庵寺 | 15. 沼弥牛住居跡群 | 25. 日上筑山古墳群 | 35. 小折城址 |
| 6. 夜半魔寺 | 16. 沼E遺跡 | 26. 目上天王山古墳 | 36. 荒神山城址 |
| 7. 川崎寺跡 | 17. 沼京免遺跡 | 27. 国分寺板塚古墳 | 37. 瓜生原城址 |
| 8. 恵高下庭寺 | 18. 沼竹ノ下遺跡 | 28. 井口草履古墳 | 38. 横手城址 |
| 9. 橋野鹿寺 | 19. 押入西遺跡 | 29. 古山城址 | 39. 塔尾城址 |
| 10. 上原遺跡 | 20. 天神原遺跡 | 30. 別所城址 | 40. 津山城址 |

群(28基)、川崎六ツ塚古墳群(6基、Fig. 2-24)、三毛ヶ池古墳群(7基)、まいまい塚古墳群(10基)、日上歟山古墳群(61基)などの顕著な古墳群があり、国分寺東背後の丘陵には、8基から構成される鏡音山古墳群がある。⁽¹⁾ 国分寺の造営は、これら古墳からうかがうことのできる古墳時代以来の勢力の動向を無視しては考えられない。

奈良時代の初頭、和銅6(713)年、備前国英多・勝田・苦田・久米・大庭・真島の6郡を割いて美作國が設置された。国府は国分寺の西北約4.8kmの津山市總社の台地上に造営された(Fig. 2-3)。この地域では、1971年から72年にかけて岡山県教育委員会が、また、1976年から77年にかけて本委員会がそれぞれ発掘調査を行なった。岡山県教育委員会の調査は、中国縦貫自動車道建設に先立ち、西北部を対象としたもので、奈良時代から平安時代にかけての建物・井戸・築地状構などが検出された。本委員会の調査は、中学校建設に際し、東南部で行なったもので、建物・井戸・大溝などを検出した。しかし、これらの遺構は、平安時代末ないし鎌倉時代初頭にかけてのものとみられ、現状では、この地区に奈良時代から国府が設置されたかどうか決定しがたい。一帯に残存する条里制地割を参照すれば、国府は總社字幸畠・南幸畠・北幸畠を中心とするほぼ2町城に、また、国府は山北字溝ノ内と同字一丁目を画する南北の小水路・小原川を東限とするほぼ6町城に、それぞれ想定することも可能である。とすれば、岡山県教育委員会の発掘地区は府域西北部に、本委員会の調査地区は府域外に、それぞれあたることになる。国分寺跡の東約6.5kmには、いずれも勝田郡衙に関連すると考えられている勝間田遺跡・平遺跡があり、同じく、西約10.9kmには、久米郡衙と推定される宮尾遺跡があつて、ともに岡山県教育委員会により発掘調査が実施されている。

美作の古代寺院跡は、長大寺跡(今岡磨寺)・大海庵寺・土居庵寺・竹田庵寺・江見庵寺・檜原庵寺(以上英多郡)、美作国分寺跡・同国分尼寺跡(以上勝田郡)、夜半庵寺(苦田郡)、弓削庵寺・久米庵寺(以上久米郡)、五反庵寺(大庭郡)などが知られており、真嶋郡を除く5郡に分布する。ただし、これらがすべて寺院跡かあるいは官衙跡かはなお検討すべき余地があるが、国分寺跡・国分尼寺跡などを除くほとんどが、美作國設置前の白鳳時代に創建されたと推定されていることは注目すべきであろう。⁽²⁾ 大海庵寺・檜原庵寺・久米庵寺が岡山県教育委員会によつて発掘調査が行なわれている。⁽³⁾

美作国分尼寺跡は、国分寺跡の西約500mの国分寺字古池から日上字人神にかけての地区に位置する。発掘調査は行なわれていないが、古瓦が散布し、また寺域を示すと推定される方格地割が明瞭に遺存することなどから、ほぼ方1町の寺域が想定できる。

註

- (1). 古墳群については、岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図(第1分冊)』1973に掲った。
- (2). 岡山県教育委員会「美作國府」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』、1973)
- (3). 今井 勲「原始社会から古代国家の成立へ」(『津山市史第1巻(原始・古代)』、1972)。

- 河本 清・岡田 博「美作地方の官衙」(『仏教藝術124号』1979)
- (4). 岡山県教育委員会「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」(『岡山県埋蔵文化財報告書4』1974)、同「平遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』1975)、同「宮尾遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973)
- (5). 永山卯三郎『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告第6冊』1926、今井 邦前掲論文、岡山県教育委員会「檍原庵寺跡緊急発掘調査概報」1976
- (6). 岡山県教育委員会「檍原庵寺緊急発掘調査概報」
- (7). 岡山県教育委員会「大海庵寺緊急発掘調査報告書」1978、同「大海庵寺緊急発掘調査報告書II」1979、同「久米庵寺」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973)、同「久米庵寺(補遺編)」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』1978)
- (8). 永山卯三郎前掲書、今井 邦前掲書。なお、永山前掲書66頁の地図では、美作国分尼寺跡が実際より東へよっている。筆写の際の誤りであろう。

II 調査の経過

1. 調査に至る経過

津山市国分寺の一角には、天台宗龍寿山国分寺がある。この現国分寺の境内には、付近から搬入されたと伝えられる礎石6個が置かれ、また、周辺の水田一帯には、⁽¹⁾ 大門・弁天前・中塔などの寺院関連小字名が遺存する。さらに、この付近には瓦が多量に散布するが、とくに国分寺を推定させる顕著な地物はない。大正15（1926）年、永山卯三郎は始めてこの地区に美作国⁽²⁾ 分寺を推定し、その研究成果に依拠して、昭和16年、県史蹟に指定された。しかし、この県史蹟指定は戦後もなく解除された。永山卯三郎以後には、石田茂作をはじめ、諸氏の研究が行⁽³⁾ なられてきたが、それらはいずれも発掘調査を経たものでなく、上記礎石や採集瓦などの断片的な資料にとどくものであり、国分寺跡の具体的な位置や伽藍配置などは、依然として不明のままであった。

昭和50年、中国縦貫自動車道美作～落合間が開通し、そのインターチェンジが国分寺跡の東北約1.7kmに設置されると、国分寺周辺の静かな田園地帯にも、工場建設や宅地造成などの開発の波が及ぶ情勢となつた。本委員会では、このような情勢に対処するため、まず昭和49年3月、推定寺域周辺の分布調査を行なつた。この結果、兼田から瓜生原に通じる南北道路と河辺小学校南端を通じる東西道路にはさまれた現国分寺西方の水田に、集中して瓦が散布する状況をつきとめた。この調査成果にもとづいて、保存のためさらに詳細な基礎資料を得るべく、3カ年の発掘調査計画を立案し、昭和51年度から岡・県の補助金を得て、それを開始した。その後、3カ年計画では所期の目的を達成することが困難となつたので、途中からさらに1カ年延長し、4カ年計画とした。

2. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり、8名からなる保存対策委員会議に調査の基本計画・方法などの指導をうけ、主として本委員会職員によって現地調査を行なうこととした。調査關係者は次のとおりである。

保存対策員 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

研究指導部長

田中 琢（第1次～第4次）

岡山県文化財保護審議委員

鎌木義昌（第1次～第4次）

同

上

近藤義郎（第1次～第4次）

	岡山県文化財保護審議委員	水内昌康（第1次～第4次）
	岡山県教育庁文化課長	小林孝男（第1次）
	同 上	飛田真澄（第2次～第3次）
	同 上	近藤信司（第4次）
	津山市文化財保護委員会委員長	江原 滋（第1次～第3次）
	同 上	宮本祥郎（第4次）
	津山市文化財保護委員会副委員長	小山健三（第1次～第3次）
	同 上	竹久順一（第4次）
	津山市国分寺町内会長	江原治道（第2次～第4次）
調査指導	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 主任研究官	伊東太作（第1次）
	同 文部技官	田辺征夫（第1次）
	同 文部技官	岩本正二（第3次）
	岡山県教育庁文化課文化財保護主査	葛原克人（第1次）
	同 文化財保護主査のち文化財二係長	河本 清（第2次～第4次）
調査員	津山市教育委員会社会教育課文化財保護主査	河本 清（第1次）
	同 主事	湊 哲夫（第1次～第4次）
	同 主事	安川豊史（第2次～第3次）
	同 事務員	行田裕美（第4次）
調査補助員	国貢圭也（第2次～第3次）、近藤正友（第2次～第3次）、森 潤（第2次）、松本 真澄（第4次）	

なお、第1次～第3次調査に津山市教育委員会社会教育課主事中山俊紀の援助を得た。

3. 発掘経過

発掘調査は、昭和51年度から54年度まで、4次にわけて水稻収穫後の農閑期に実施した。調査では、できるだけ小面積のトレンチによって、主要伽藍と寺域を確定することを目標とした。また、計画したトレンチの他に、地権者の要請により、新たに暗渠排水用の溝を掘さくした。各トレンチから延びる幅約50cmの溝がこれであるが、これらは原則として精査を行なっていない。しかし、これらの溝で遺構を検出したところもあり、そのような地点については必要に応じて精査を行なった。以下、各次ごとの経過を述べる。⁽⁵⁾

第1次調査　国分寺跡推定地一帯約129,600m²の地形測量を行ない、500分の1縮尺の地形図を作成した。測量は民間業者に委託し、昭和51年12月2日に開始し、翌1月31日に完了した。発掘調査は、国分寺293-1番地の大野木由夫氏所有の水田でかつて水田暗渠排水の折、塹列が

発見されたという聞き込みにもとづき、当初、その地点から着手する準備を進めた。しかし、諸般の理由によって、この地点の調査を断念せざるを得なくなり、発掘地点をその南の国分寺公会堂増築部分に切り換えた。発掘面積35m²。調査個所はT-1・T-2の2個所である。この両トレンチで基壇土を検出し、上記塙列から予想される建物と別の建物と考え、金堂ないし講堂と推定した。

⁽⁶⁾ 第2次調査 発掘面積 257m²。調査個所T-3からT-11までの9個所。第2次調査は、第1次調査地点の北の先に述べた塙列発見地点から開始した。T-3からT-7までのトレンチによって、塙積基壇化粧を行する建物の基壇規模をほぼ確認し、これを講堂とすれば、第1次調査及びT-4排水トレンチによって基壇北縁を確認した建物が金堂と推定できるようになった。講堂を検出した水田の南約100mに中門、または南約135mに南門を想定しうる地形を地形図から判読したので、それぞれの地点にT-11とT-8～T-10のトレンチを設定し、中門・南門の基壇を検出した。また、講堂の中心と南門棟通り中央間礎石抜取穴の中心を結ぶことによって、伽藍中軸線が推定できた。これはほぼ真北に一致していた。なお、この段階で、残る1カ年では、主要伽藍と守城を確定することは困難と思われたので、調査を4カ年計画に変更した。

第3次調査 調査面積 308m²。調査個所T-12からT-27までの16個所。金堂・中門の精査と塔の確認及び南門の補足調査を目的とした。金堂では順調に調査が進行して、基壇東縁・南縁・北縁を検出し、これが周囲に玉石敷の大走りと雨落溝を行する建物であることを確認し、また、建物東北隅柱の礎石据付け痕を検出した。中門については、基壇東北隅と東南隅をほぼ把握した。さらに、金堂と中門への回廊の取り付き部を検出した。南門は遺存状態が悪く、第2次調査以上の成果をあげえなかった。塔については、南門の東北東に、北と西に対して一段高くなり、かつ巨石が埋没しているとの伝承のあるほぼ正方形の水田があったので、ここに塔を想定した。そして、T-19・T-20を設定したが、塔の痕跡は認められず、中世の柱穴群を検出したにとどまった。その後、ボーリングで各所を探査したが、手がかりはなく、この段階では、塔の検出を断念せざるを得なかった。

第4次調査 調査面積 175m²。調査個所T-28からT-36までの9個所。回廊と寺域東・西・北限の確定を目的とした。回廊については、前年度の調査で検出した金堂に取り付く北面回廊が、創建当初のものでなく、付け替えられたのちのものである可能性も考えられ、とすれば、第2次調査で検出されていた講堂基壇東縁から直交して東へ延びる塙列が、あるいは当初の回廊取り付き部と考えられるのではないかとの想定もあり、T-28・T-29を設定した。調査の結果、整地層などを検出したのみで、回廊の痕跡は認められなかった。東面回廊は想定どおりT-32で確認した。寺域東限は築地を確認しなかったものの、広い溝を検出し、これを寺域を画する施設と判断した。この東限を画する溝を推定伽藍中軸線を中心として折り返した地

点に寺域西限を推定したが、諸般の事情により調査ができなかった。また、寺域東西間の距離を南門中心から北にとって、寺域北限を推定したが、この地点は宅地が密集していたため調査不能であった。推定寺域北限に近い T-35で新たな建物を検出し、これを北方建物と呼んだ。また、寺域東限を調査するためトレンチ・T-31から暗渠排水用の溝を掘ったところ、偶然、玉石敷溝を発見した。そして、その立地状況やボーリング調査の結果から、これが塔の東雨落溝と推定できた。しかし、すでに調査期日が切迫していたので、調査区を拡張しての精査は行なえなかった。

註

- (1). これらの礎石のうち、1個は柱座と地覆座を造り出し、他の5個は揃ないしその剝離した痕跡をもつ。
- (2). 永山卯三郎『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告第6冊』(1926) なお、永山には以後、『岡山県通史』1930「美作国分寺」(角田文衛編『国分寺の研究』1938) がある。
- (3). 石田茂作『東大寺と国分寺』1959
- (4). 今井 勇「原始社会から古代国家の成立へ」(『津山市史第1巻(原始・古代)』1972) など
- (5). トレンチ番号は調査順に付した。
- (6). 発掘面積中には、新たに掘さくした暗渠排水溝の面積は含まれていない。以下同様。

III 遺構

昭和51年度から54年度まで、4次にわたる調査で計36カ所のトレンチを設けた。その結果、金堂・講堂・中門・回廊・塔・南門・北方建物・寺域を画する施設、その他の遺構・国分寺廃絶後の遺構などを検出した。国分寺跡は北東から南西へ次第に下降する地形に立地する。寺域東端と西端との現水面での比高差は、寺域南端付近で約5mを測り、また、南端と北端では、伽藍中軸線付近で約2mの比高差がある。

調査は小トレンチを設けて行なったため、基壇縁辺部や外周の雨落溝などを部分的に検出したにすぎない。遺構の遺存状況もよくなく、礎石はすべて抜き取られ、基壇下部が若干残存するのみである。しかし、講堂基壇東西各縁と南門棟通り中央間礎石抜取穴を検出したので、それぞれの中心点を結んで伽藍中軸線を想定できた。この線は座標北に対して N1°8'45" W の偏倚角を有し、かつ金堂北雨落溝東西線とほぼ直交する。この伽藍中軸線の推定により、金堂・講堂・中門・回廊・南門については、ほぼ基壇の全容を推測することができた。以下、各遺構ごとに記述する。

1. 金堂 (PLAN. 3~5, PL. 3~5, 13-1, 14-1)

寺域のはば中心に位置する礎石建瓦葺の建物である。基壇は復元東西37.3m⁽¹⁾ (125尺)、南北22.4m (75尺) である。

基壇東辺部では、耕土・床土の下でただちに基壇土が認められ、中央部では、その間に薄い褐色粗砂土層が入る。基壇西辺部では、暗褐色粗砂質土層下に暗褐色微砂質土層が堆積し、その下が基壇土となる。基壇上検出面は東辺部で表土下約20cmである。基壇土の下は黄褐色砂質の地山となるが、基壇西北隅のT-14付近では厚く堆積した黒色粘質土がある。

金堂の遺構は、遺存状況の最も良い基壇東辺部及び北辺部のT-12・T-13で観察したところでは、基壇周辺に幅1.3mの玉石敷の犬走りをめぐらし、その外に一段低い幅75cm、深さ15cmの同じく玉石敷の雨落溝があり、さらにその外周に東で幅80cm、北で幅70cmの玉石敷がめぐる構造となっている。使用されている石は20~50cm程度の楕円形のものである。犬走りの内部にあたる基壇は、その化粧がすべて破壊されているが、犬走り内縁の下石が一直線に整然と連なり、かつ付近に塙の破片が散在するところから、後述の講堂基壇化粧と同様に、犬走りの内側に塙を立て並べて基壇化粧とした可能性がある。この下石敷犬走り内縁線と基壇土との間には、幅30cm程の暗褐色土があり、おそらく裏込め土と考えられる。基壇残存高は犬走り内縁の下石上面から計測して15cmを測る。基壇西縁の推定位置は、道路下にあたり、調査できな

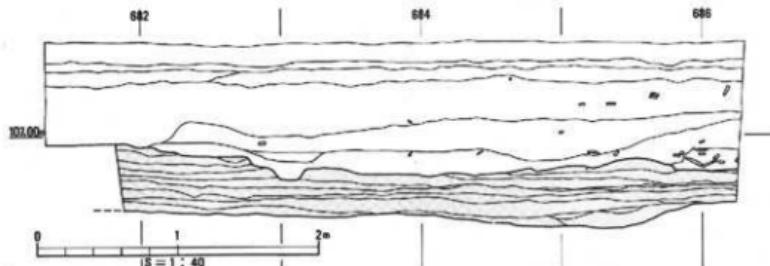


Fig. 3 金堂基壇土 (T-15東壁断面)

かった。この道路面は基壇側にあたる東の水田面より約60cmも低く、おそらく遺構は削平されているものと思われる。基壇南縁はT-18とT-25で確認したが、いずれも遺存状態が悪く、基壇縁辺と思われる位置に玉石もしくはその抜取痕を検出したのみである。しかし、その南に2段の階段状遺構を検出した。上段は幅1.5m、下段は幅1.1m、段差は上からそれぞれ20cm、25cm、15cmを測り、各段の縁端は玉石で補強されている。この遺構はあるいは金堂の階段かとも考えられるが、縁端玉石の下には瓦が詰まっており、少なくとも創建時の遺構ではない。

基壇の築成は、特に掘り込み地業を施さず、厚さ約5cmの黄褐色砂質土と黒褐色粘質土を直接地山上に互層につき固めたもので、東辺部のT-12で厚さ25cm、西辺部のT-15で厚さ50cmが残存する(Fig. 3)。なお、T-16の基壇化粧裏込め土およびT-14の基壇土中から、瓦片数点が出土した。

建物東北隅の礎石痕跡をT-12で検出した。これは径1.5m、深さ15~20cmの土坑で、底に根固め石が硯く。この礎石痕跡からは、厚さ5~10cmの暗赤褐色土と茶褐色土を互層につき固めた積み土が、基底部径約3.5mの円丘状に盛られた状況が確認された。おそらく、礎石の下部と周辺を根固め石と上記積み土で固定したのち、基壇を築成したものであろう(Fig. 4)。この礎石痕跡からすると、金堂建物の軒の出は3mを越えるものとなろう。他の礎石の痕跡は、精査したにもかかわらず検出できなかった。あるいは、他の礎石の据え付け方法は、この東北

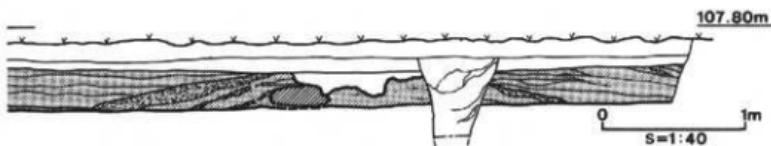


Fig. 4 金堂礎石の据付けと基壇築成 (T-12西壁断面)

隅礎石とは異なったものかも知れない。

基壇外とくに犬走りと雨落溝上層には、大量の瓦が堆積していた。なお、T-18の基壇南辺部で検出された径約1.5mの浅い土坑は礎石痕跡とは無関係であろう。また、T-25南東部の円形の土坑は現代のものである。

2. 講 堂 (PLAN. 6・7、PL. 6・7)

(2) 金章の北34.7m(117尺)に位置する礎石建瓦葺の建物である。基壇は東西29.7m(100尺)、南北19.0m(64尺)で、埠を立て並べて化粧とする。

基壇東半部では、厚さ20~25cmの耕土・床土直下が基壇土となる。基壇西半部では、その間に暗褐色砂質土ないし灰褐色粘質土が入る。基壇土の下層は、基壇東辺部では黄褐色砂質の地山となるが、中央部から西辺部にかけては黒色粘質土となっている。この粘質土はT-5東端で47cmの厚さを有する。基壇外には瓦を多量に含む暗褐色砂質土が厚く堆積する。

基壇は東西南北の各縁を検出した。基壇残存高は遺存状況の最も良好な東縁では44cmである。基壇東縁で地山上に直接正方形ないし長方形の埠を垂直に立てて化粧としている状況を検出した。埠は正方形のものが方約27cm、長方形のものが長辺約29cm、短辺約22cmで、厚さはいずれも5.0~6.6cmを測る。東縁のT-3南端部ではこの埠の上に40×15cmの楕円形の玉石1個を検出した。これが偶然によるものでないとすれば、埠と玉石を併用した化粧となるが、むしろ補修にかかるものとみるべきであろう。同じく東縁のT-3では、基壇外に東へ延びる埠列が検出された。埠は1枚遺存しているだけであるが、左右にその抜取痕を検出したので、もとは基壇にほぼ直角に並んでいたものと推定される。この埠列の東端は水田暗渠排水により切られているので明確でないが、さらに東へ連続していたものと思われる。遺存する埠は長辺23cm、短辺12cm、厚さ6.5cmで、地山を掘り窪めて固定されており、上端3cmのみが露出している。取り上げていないため確実できないが、おそらく基壇化粧に使用されている類の埠を打ち削ったものと推定される。この遺構の性格はよくわからないが、あるいは階段の痕跡かも知れない。基壇西・南・北の各縁は、それぞれT-5・T-6・T-7のトレンチで検出した。いずれも基壇化粧は確認されなかったが、現存する基壇土の端が基壇縁辺と推定される。

基壇の築成は厚さ約5cmの暗黄褐色微砂質土と黒褐色粘質土を互層に積み上げて行なう。ただし、北辺部のT-7で検出された基壇土は上と異なり、現存する部分では黒褐色微砂土のみを細かく積み上げたものとなっている。

講堂の調査区では、礎石の痕跡は確認されなかったが、基壇西辺部のT-5で礎石を落し込んだ穴を検出した。これは長径3.3m、短径2.3mの楕円形の土坑で、中に瓦が多量に投棄されている。発見された礎石はやや北よりに落し込まれている。178cm×92cmの半月型のもので、半分に削られた片方のものである。礎石には柱庵や枠などは確認されなかった。

雨落溝は検出されていない。なお、T-5 東端部で検出された西北方向に斜行する溝は既設の水田暗渠排水である。

3. 中門 (PLAN. 8・9, PL. 8・13-2)

金堂の南57.5m(194尺)に位置する礎石建瓦葺の建物である。基壇は復元東西22.6m(76尺)、南北12.1m(41尺)、乱石積化粧である。

基壇東半部では、耕土・底土の下に暗褐色ないし灰褐色の微砂質土が堆積し、その下が基壇土となる。現存基壇土面は東辺部のT-26で表土下60cmである。基壇中央部のT-11では、水田の地上上げが行なわれており、耕土下に盛土と旧耕土が認められる。基壇土下層は、基壇東北隅のT-24では緑褐色粘質土となり、東辺部中央のT-26ではただちに地山となる。地山面はT-24で地表下1.35mである。基壇外には瓦を多量に含む暗褐色砂質土が厚く堆積する。

基壇は東・南・北の各縁を検出した。基壇化粧は、20×30cm程度の楕円形の玉石による乱石積である。基壇東北隅のT-24では、この乱石積の下部1段のみが残存し、現存基壇高は25cmである。同じくT-24では、基壇化粧玉石列の内側約50cmに同様の玉石による控え積みがあり、この両石列間には瓦が詰め込まれている。両石列下の暗緑褐色微砂質土中には瓦が多く含まれており、この乱石積化粧及び控え積みは修復時の仕事と判断された。基壇南東隅のT-27では、基壇化粧は破壊されているが、現存の基壇土端が基壇縁辺と推定された。

基壇の築成は、東辺部のT-26では地山上に厚さ45cmまで灰色の粘土と砂をはば厚さ5cmごとに積み上げ、この上にさらに厚さ70cmまで暗黄褐色微砂土と黒褐色粘質土をはば厚さ5cmごとに積み上げ、計厚さ115cmの基壇土となる(Fig. 5)。しかし、基壇東北隅のT-24では、上層の暗黄褐色微砂質土と黒褐色粘質土の互層が緑褐色粘質土上に厚さ45cmまで積まれているのみである。なお、T-26上層基壇土中に少量の瓦を検出した。

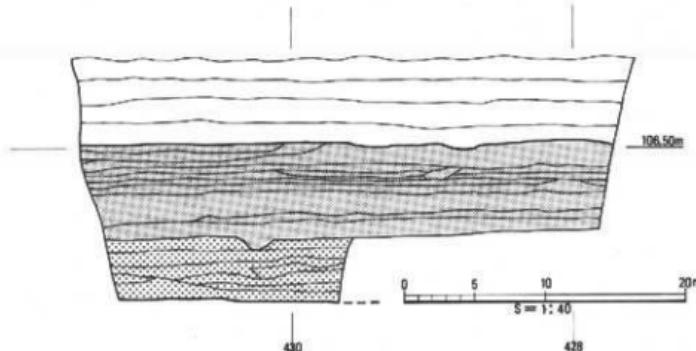
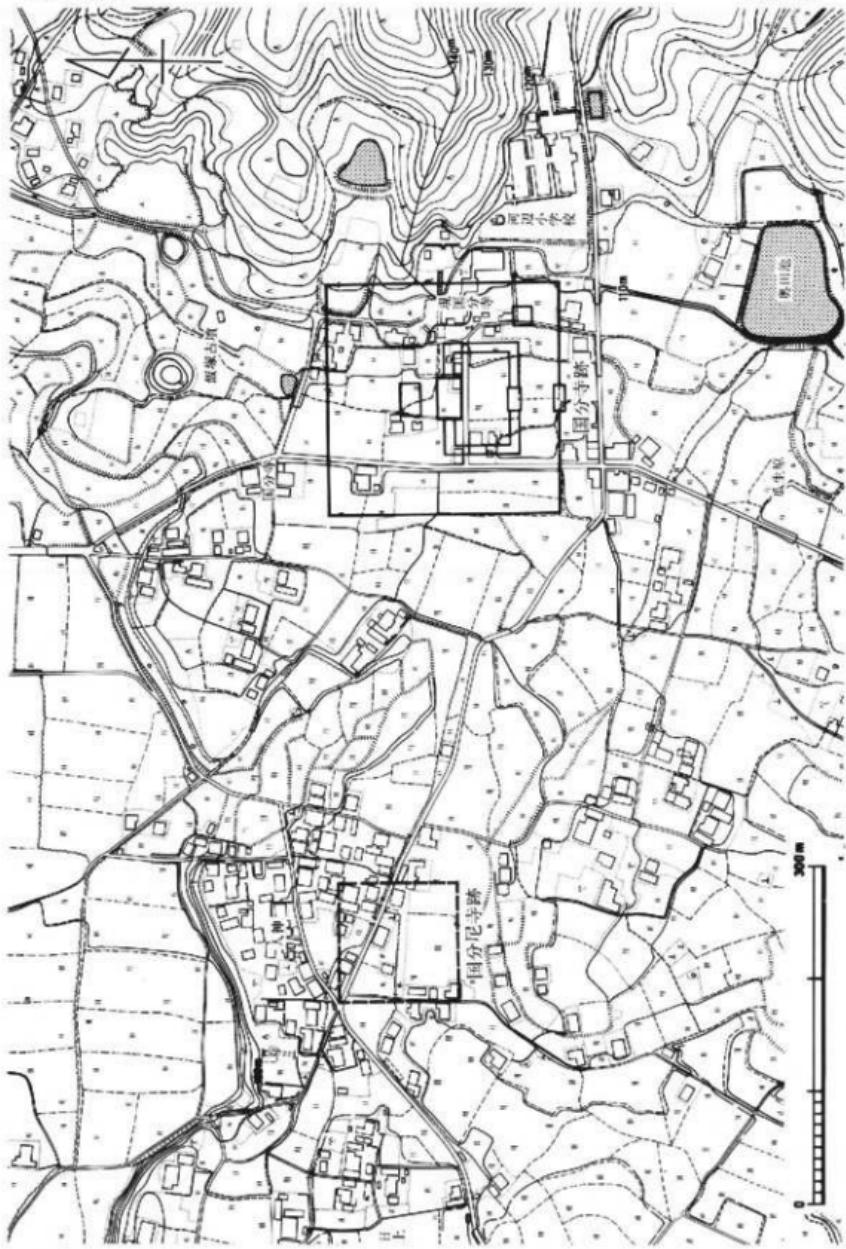


Fig. 5 中門・回廊基壇土 (T-26北壁断面)

周辺地形図

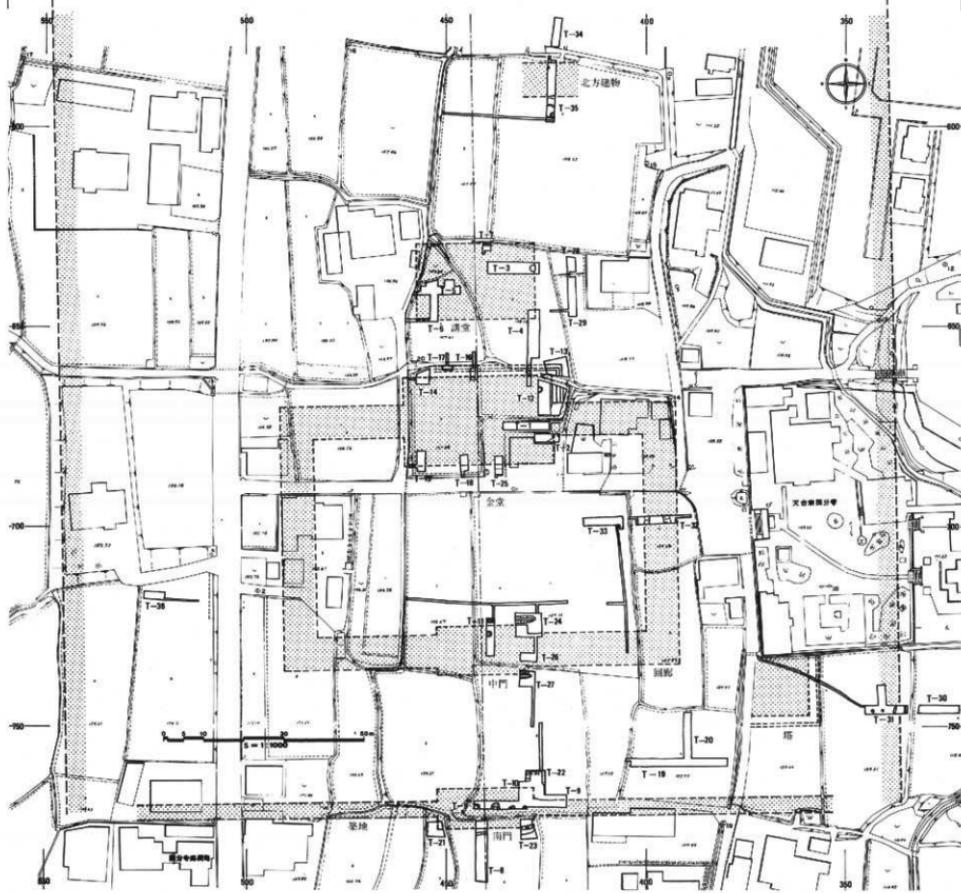
PLAN. I

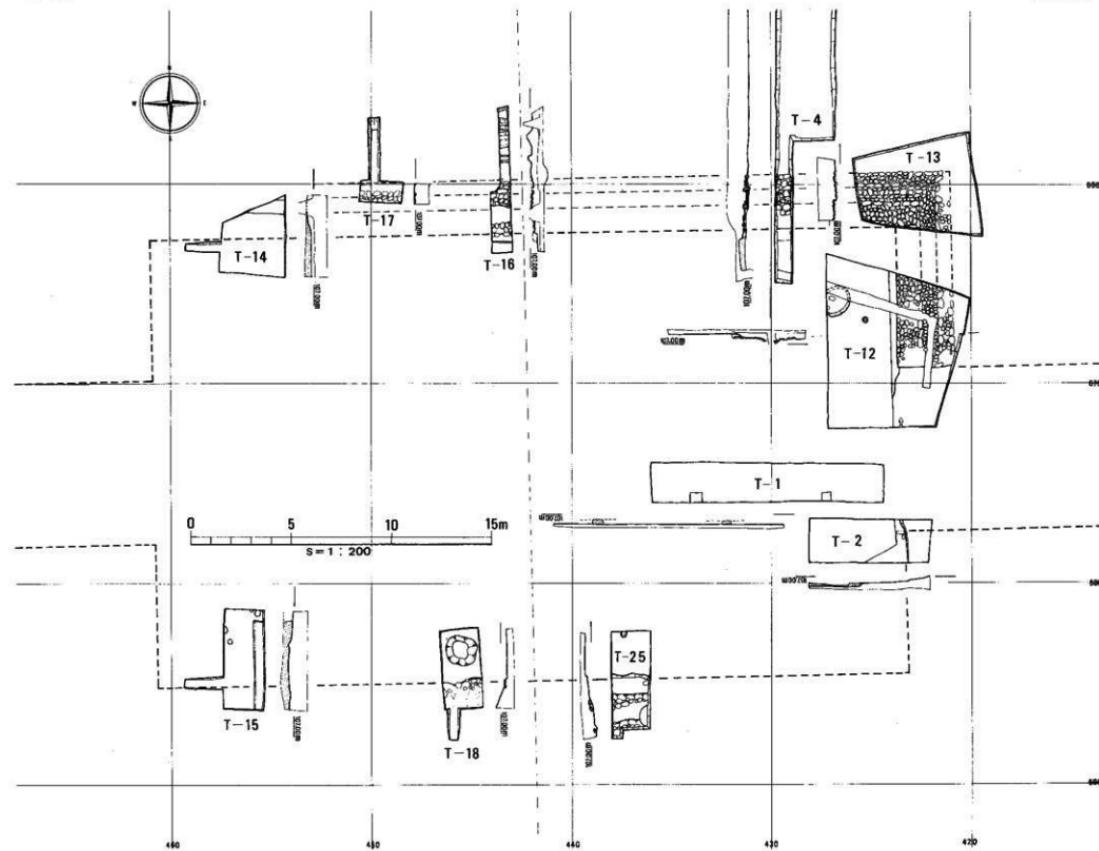


S = 1 : 5000

伽藍配置図

PLAN.2





北側柱東第3礎石にあたると思われる礎石抜取穴をT-11で検出した。これは径1.5m、深さ18cmの浅い土坑で、埋没土中に瓦と石を多く含んでいる。この抜取穴は推定伽藍中軸線から1.6m東にある。

北雨落溝はT-11とT-24の2箇所で検出した。これは幅1~1.8m、深さ30~45cmの素掘りの東西溝で、埋没土中に多数の瓦を含む。この溝は基壇東北隅で南折せず、そのまま消滅する。また、基壇南縁に近接して、幅75cm、深さ10cmの浅い東西溝を検出した。この溝も基壇の東で消滅する。あるいは南雨落溝かも知れない。

4. 回廊 (PLAN. 3・4・8・9・12, PL. 3・4-2・8-1・9-1)

回廊は中門側面と金堂側面中央に取り付く。基壇幅は8.3m(28尺)、乱石積基壇化粧である。礎石痕跡は検出されていないが、基壇幅からみて複廊と推定される。検出した東面回廊と推定伽藍中軸線により折り返して復元した西面回廊との距離は90.4m(304尺)となる。東面・南面・北面の各回廊を検出した。

東面回廊 東面回廊はT-32で検出した。厚さ45cmの耕土及び灰褐色粘質土層の下に基壇が検出された。基壇は黄褐色砂質の地山を削り出したもので、残存高は70cmである。基壇化粧は破壊されている。基壇残存基底部は幅6.7mを測るが、東辺部は大きく削りとられており、西辺部も後世の溝によって削られている。もとの基壇幅は後述の南面回廊と北面回廊の基壇幅から判断して8.3mと推定される。このT-32西端で深さ10cmの落ち込みを検出した。西雨落溝の可能性もある。

南面回廊 南面回廊はT-24で中門取り付き部基壇北縁を検出した。中門基壇北縁から南面回廊基壇入隅部までの距離は1.9mで、復元基壇幅は8.3mとなる。基壇化粧は20×30cm程度の楕円形の玉石を積んだもので、現状では下部1段のみが残存する。基壇残存高は30cmである。基壇化粧下の暗黃褐色微砂質土中に瓦をやや多く含んでるので、中門基壇化粧と同じく修復にかかる可能性もある(Fig. 6)。基壇土は中門から連続しており、中門基壇と同時に築成されたことがうかがわれる。

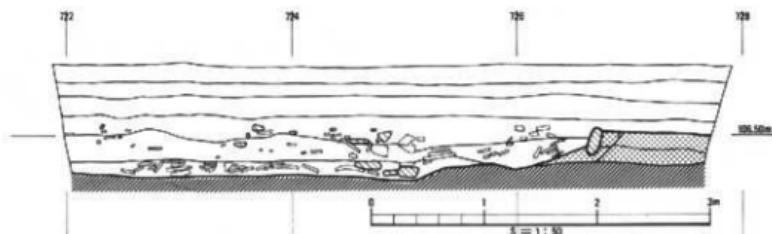


Fig. 6 南面回廊基壇断面 (T-24東壁断面)

北面回廊 北面回廊はT-12で金堂取り付き部基壇北縁を検出した。金堂基壇北縁から北面回廊基壇入隅部までの距離は7.05mで、復元基壇幅は8.3mとなる。基壇化粧は大部分破壊されているが、基壇北縁に玉石1個をほぼ原位置で検出したので、もとは南面回廊と同じく乱石積と推定される。基壇残存高は金堂犬走りの玉石上面から計測すると20cmである。基壇の築成は黄褐色の砂質土と粘質土をほぼ厚さ10cmごとに積み上げたもので、厚さは現状で40cmを測る。回廊基壇土と金堂基壇土とは明瞭な差異が認められ、かつ金堂基壇化粧裏込土は回廊基壇内に1.5mにわたって食い込む。また、回廊基壇の断ち割り調査によれば、回廊基壇下に部分的ではあるが、玉石もしくはその抜取痕を検出した。さらに、回廊基壇入隅部の金堂の犬走りと雨落溝は回廊基壇土と同じ黄褐色砂質土で覆われる (Fig. 7)。これらの事実から、金堂東の犬走りと雨落溝は、もとは回廊部まで敷設されており、その後それらの大部分を抜き取って回廊基壇が築成されたと判断された。あるいは、この回廊基壇は金堂創建当初のものでなく、その後の築造にかかるものの可能性もあるが、調査が小範囲に限られているので断定をさし控えたい。北面回廊南縁の金堂取り付き部分は、復元すればT-2東北部にあたり、その部分で玉石2個を検出した。

5. 塔 (PLAN.12, PL. 9-2)

回廊の外、寺域の東南隅に近く位置する瓦葺建物。寺域東限検出のために設けたT-31から

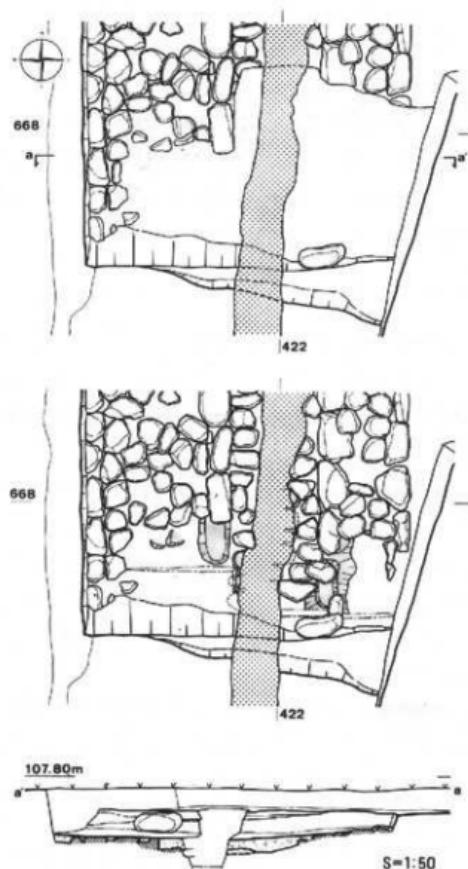


Fig. 7 北面回廊基壇入隅部 (T-12)

掘った暗渠排水溝中で、基壇とそれをめぐる東犬走りと雨落溝を検出した。基壇は表下25cmにあり、現存高は約10cmである。基壇化粧は破壊されているが、犬走り西端を基壇東縁と理解した。この東縁は推定伽藍中軸線から81.6m(275尺) 東に位置する。基壇外には20×30cm程度の楕円形の玉石を敷き詰めた幅1.85mの犬走りがあり、この外に一段低く同様の玉石からなる幅65cm、深さ8cmの雨落溝が敷設されている。この状況は金堂と類似するが、それと異なり外側の犬走りは存在しない。ボーリング調査により、犬走りと雨落溝の玉石を追跡したところ、北では現国分寺境内に入り、南では西折して西側の道路下まで続いている。現国分寺南堀からボーリング調査による推定基壇南縁までは約16mあり、基壇はそれ以上の規模を有していることが判明した。基壇東縁から2.7m西の地点から西側の基壇土中には、20×30cm程度の楕円形の玉石がブロック状に検出された。これらの玉石群は基壇外の犬走りとほぼ同レベルにある。これらの性格は部分的な調査のため明らかにしえなかった。なお、雨落溝上層とその外側にかけては大量の瓦が堆積している。

6. 南門 (PLAN.10・11、PL.10・11・14)

南門の南39.7m(134尺)に位置する礎石建瓦葺の建物。基壇は東西24.1m(81尺)、南北10.0m(34尺)に復元される。建物は桁行5間、梁間2間と推定される。

南門基壇付近では、厚さ15~30cmの耕土・床土下に灰色粘質土が堆積し、その下に基壇土が検出される。基壇検出面は表土下40cmである。基壇下には黄褐色粘質の地山がある。基壇外には瓦を多量に含む灰色粘質土が厚く堆積する。

基壇は東縁と南縁を検出した。基壇東縁はT-9でわずかな段差がみられ、その低い部分に瓦が堆積する状況から、基壇縁辺を確認したものである。基壇西縁は復元すればT-21にあたるが、完全に破壊されていた。基壇南縁はT-8で検出した。基壇化粧は破壊されている。基壇南縁に接して、すわった状況の玉石2個を検出し、またこの付近で多くの遊離した玉石を検出した。さらに、南門の各トレチで多くの場所が検出されており、基壇化粧は乱石積か塙を使用したものか判断しがたい。基壇東南隅にあたるT-23では、基壇は削平され、また東北隅にあたるT-10・T-22でも基壇が削平されており、いずれも明確な縁辺を検出しえなかった。従って、基壇南北幅は、次に述べる建物棟通り礎石抜取穴中心から基壇南縁までの距離5mを北に折り返して復元した。

基壇の築成は、厚さ5~10cmの灰褐色砂質土と黄白色粘質土を互層に積んで行ない、現存の厚さは20cmである。

基壇南辺部のT-8では、基壇南縁に接して幅60~90cmの犬走り状の平坦部があり、その外に幅80cm、深さ10cmの素掘りの東西溝がつくられており、南雨落溝と思われる。雨落溝には瓦を多量に含む灰色粘質土が堆積する。基壇東南隅のT-23では、犬走り状の平坦部ではなく、幅

2 m、深さ40cmの溝となっている。この溝は基壇にそって北へ曲がる。溝の埋没土は上層と下層で異なり、上層は擾乱をうけているが、下層は雨落溝埋没土と推定され、この下層から瓦とともに多量の土器が出土した。東・西・北の各雨落溝は検出できなかった。

現存基壇上面では、棟通りに礎石抜取穴3間分を検出した。これらは径1.5~2 m、深さ10~15cmの不整円形の土坑で、内部に遺物を含まない灰色粘質土が堆積する。抜取穴間の心々距離は西から4.9m(17尺)、4.05m(14尺)、3.25m(11尺)となっている。西の最大の柱間が伽藍中軸線上にあたると推定され、これが建物中央柱間となって、東西に柱間が通減していくことになる。従って、建物は桁行5間19.5m(66尺)と復元できる。梁間は南北側柱列を確認できなかつたが、基壇規模から判断して2間であろう。なお、軒の出は桁行方向で2.3m(8尺)に復元できる。

T-9西区からT-22にかけて、基壇下に東北方向に斜行する幅約2 m、深さ約55cmのU字溝を検出した。埋没土中に甕や軒平瓦I型式を含んでおり、国分寺造営当時のものと解されるが、性格は明らかでない。

なお、T-8とT-23の雨落溝は南北の水田暗渠排水溝により断ち切られている。

7. 北方建物 (PLAN.13, PL.12-1)

講堂の北50.7m(171尺)にあたる位置で検出した礎石建瓦葺の建物である。基壇は南北8.6m(29尺)を測る。

基壇北半部では、厚さ20cmの耕土・床土の下ににただちに基壇が検出される。基壇南半部ではこの間に暗灰褐色土層が堆積し、基壇南縁にむかうに従い、その暗灰褐色土が徐々に厚くなる。南縁での基壇検出面は表土下45cmとなる。基壇外には、南北ともに瓦を多量に含む黒褐色土層が堆積する。

基壇は黄褐色砂質の地山を削り出したもので、南縁と北縁を検出したのみである。現存基壇高は北縁で15cmを測る。基壇化粧は破壊されている。

基壇の南北で、その縁辺に接して素掘りの東西溝を検出した。雨落溝と思われる。南雨落溝はかなり変形しているが、現状で幅1.8 m、深さ25cmを測る。北雨落溝は幅1.9 m、深さ40cmのU字溝で比較的の遺存状態がよい。両雨落溝とも、瓦を多数含む黒褐色土が堆積する。

基壇北縁の南1.2m(4尺)に礎石痕跡を検出した。これは径55cmの円形の土坑で、坑底には根固め石と思われる径20~30cm程度の玉石3個が地山内にめりこんだ状態で検出された。この礎石痕跡の南には、対応する礎石痕跡が検出されなかつたが、基壇の規模からみて梁間3間程度と推定される。

8. 寺域を画する施設 (PLAN.10・12, PL.10-1・12-2・3)

寺域を画する施設としては、南限を画する南門側面に取り付く築地と東限を画する溝を検出した。

築地 南門東側面に取り付く築地を検出した。基壇北辺部のT-9 東区で、約5cmの段差が認められ、その低い部分に瓦が堆積する状況から、基壇北縁を確認した。南門復元基壇北縁からこの築地基壇北縁までの距離は3.0m(10尺)となる。基壇南縁は確認していないが、南門と築地が棟通りを同じくしたとすれば、築地基壇幅は4.0m(13尺)と復元される。基壇は現状で厚さ5cmの灰褐色粘質土が残存するのみである。雨落溝は確認されなかった。

寺域を画する溝 寺域東限を画する溝は、塔の東に設けたT-31で検出した。これは幅2.4mないし3m、深さ30cmの素掘りの南北溝で、溝内の埋没土は上下2層にわかれる。下層は褐色砂質土で遺物を出土しないが、上層はやや粘質の暗褐色ないし灰褐色土で瓦を多く含む。推定伽藍中軸線から、この溝の中心までの距離は104.0m(350尺)である。

なお、溝の西5.7mにある南北溝とその北の東西溝はいずれも現代のものである。

9. その他の遺構

上記の遺構以外に国分寺存続期と考えられる遺構が検出された。

T-35溝III (PLAN.13) 北方建物基壇南縁の南5.2mに北縁のある東西溝である。幅は不明であるが、縁辺は2段となっている。底までの深さは32cmを測る。埋没土の黒色粘質土中には瓦を多量に含んでいる。講堂基壇北縁と北方建物基壇南縁との間は、36.9mあって、広い空間となっている。あるいは、この空間に建物があり、溝IIIはその北雨落溝にあたるのかも知れない。

T-31柱穴群 (PLAN.12, PL.12-2) 寺域東限を画する溝の西に東西に並ぶ2個の柱穴である。東柱穴は径55cm、深さ67cmの円形の掘り方である。西柱穴は径55cm、深さ87cmの円形の掘り方で、その中央やや北よりに径25cmの柱痕が認められた。柱間隔は2.5m(8尺)である。東柱穴から寺域東限の溝西縁までは2.85mを測る。この2個の柱穴は、西と南に延びる建物の一部である可能性がある。

なお、この柱穴の付近に、掘り方径約25cmの小柱穴を若干検出したが、上の柱穴とは無関係と思われる。

10. 国分寺廃絶後の遺構、その他のトレンチ

A. 国分寺廃絶後の遺構

国分寺廃絶後のほぼ鎌倉時代から室町時代にかけて、調査区の全域にわたって溝・土坑・柱穴群などの多数の遺構が検出されている。それらの主なものについて簡単に述べておこう。

T-3 土坑 (PLAN.7, PL.6-1-15) 講堂基壇東縁を切る東西1.35m、南北1.65m、

深さ65cmの不整円形の土坑である。埋没土には多数の瓦、土師質土器、備前焼、木製品、植物などの遺物が混在している。底部からは基壇東縁化粧所用のものかとみられる5個の壺があたかも倒壊したかのごとき状態で出土した。この土坑は最下層で出土した備前焼などからみて、室町時代頃に埋設したものと推定される。

T-35土坑 (PLAN.13) 北方建物の南、溝Ⅲに北接して検出された長辺1.48m、短辺96cm、深さ35cmの隅丸長方形の土坑である。埋没土には瓦、壺、勝田焼などの遺物が多く含まれている。底部から瓦当面のはば完存する軒丸瓦V型式1個が出土した。土坑内に含まれる勝田焼などからみて、平安時代末ないし鎌倉時代に埋設したものであろう。

T-19・20柱穴群 (PLAN.8、PL.15) 回廊東南隅と寺域南限との間に検出された柱穴群である。柱穴はT-19西半部とそれに直交するT-20を中心としており、調査区内では115個検出した。これらはすべて表土下約25cmの暗黄褐色微砂質土から掘り込まれている。大小種々あるが、掘り方径40cm程度のものが一般的である。深さは20cmから80cmまでの間である。一部の柱穴には柱根またはその痕跡の残存するものがあり、柱は径15cm程度と推定される。現状では建物としてまとまるものはない。これらの柱穴のつくられた時期は、その埋没土に含まれる土器からみて室町時代頃であろう。

なお、T-19中央部で柱穴検出面の下15cmの地山を切り込んで、径1m、深さ25cmのすり鉢状の土坑を検出した。底には20×25cm程の玉石4個があり、埋没土中には多くの瓦が含まれている。柱穴群に先行する構造であるが、時期・性格ともに不明である。

T-32・33柱穴群 (PLAN.12、PL.9-1) 東面回廊の付近で検出された柱穴群である。柱穴掘り方は、径25~50cm、深さ20~60cmである。これらはT-32では回廊基壇検出面から掘り込まれ、またT-33では地山面から切り込まれている。これらの柱穴は回廊基壇を切っているので、回廊廃絶後のものと思われるが、明確な時期は明らかでない。

T-35柱穴群 (PLAN.13、PL.12-1) 北方建物の付近で検出された柱穴群である。柱穴掘り方は径20~30cm、深さ20~40cmである。これらの柱穴は北方建物基壇を切っているので、北方建物廃絶後のものと思われるが、明確な時期は不明である。

T-5・6溝 (PLAN.6、PL.7) 講堂基壇西南隅付近を西北方向に斜行する溝である。幅約1.5~2m、深さ40cm程である。この溝は講堂基壇を切っているが、講堂礎石を落とし込んだ穴によって切られている。切り合ひ関係から講堂廃絶後のものと解されるが、明確な時期は不明である。

T-27溝II (PLAN.8、PL.8-2) 中門基壇東南隅の外を東北方向に斜行する溝である。幅1.65m、深さ60cm、埋没土に瓦・木製品などの遺物を多数含む。時期は不明であるが、おそらく国分寺廃絶後のものであろう。

B. その他のトレンチ

これまでの記述でとりあげなかったトレンチについて、その概要を述べておく。

T-28及びT-29は講堂の東に設けたトレンチである。両トレンチの全面に厚さ20~30cmの黄褐色砂質の整地上が検出された。これは地表下約1.3mの地山上に盛られたもので、内部には多くの瓦が含まれている。また、T-28ではこの整地土検出面から掘り込まれた幅1m、深さ15cmの東西溝と掘り方径35cmの柱穴を検出した。

T-30は寺域東限を画する溝の東に設けたトレンチである。トレンチを設けた地点の水田面は西接する水田面より約1m高い。トレンチ東端では表上下55cmに地山面があり、それは西に向かって除々に下降するが、トレンチ東端から4.7m西の地点で断差60cmの断崖がつくられている。断崖の西は平坦面となる。この平坦面は旧水田面と思われ、その地点に水田暗渠排水用の南北溝2条を検出した。このトレンチでは瓦などの遺物は非常に少ない。

T-34は北方建物の北に設けたトレンチである。トレンチ北端では地表下45cmに地山面があり、南へむかって次第に下降する。トレンチ北端やや南には、南北方向に水田暗渠排水用の土管があった。遺物は非常に少ない。

T-36は推定寺域西限線の東約20mに設けたトレンチである。厚さ70cmの耕土と灰褐色粘質土下に厚さ10cmの瓦を少量含む黄褐色粘質土があり、その下が地山面となっている。遺構は検出されなかった。

11. 小 結

以上、遺構の概要を述べてきたが、これをまとめるにあたり、まず造営尺の検討を行なっておきたい。試みに、国分寺創建時使用されていた令小尺=唐尺の1尺に近似する値である29.7cmを造営尺とすれば、金堂基壇東西が125尺、同南北75尺、講堂基壇東西が100尺、推定伽藍中軸線から塔基壇東限までが275尺、同じく中軸線から寺域東限を画する溝中心までが350尺となり、ほぼ完数に近い数値が得られる。そこで、造営尺を29.7cmとして、当初の国分寺造営計画を推定復元するとFig.8のようになる。

今回の調査は、すべて小規模のトレンチによるものであり、建物の全貌を明らかにしたものはなかったが、ほぼ主要伽藍の状況を把握することができた。すなわち、講堂・金堂・中門・南門が寺域中央に南北一直線に並び、回廊が中門と金堂をつなぎ、その東南外に塔が位置するという伽藍配置であることが判明した。

講堂の北171尺には北方建物と仮称した礎石建瓦葺の建物がある。この建物は講堂基壇東限延長線上よりさらに東へ伸びているので、伽藍中軸線に対象に西へも進なるとすれば、きわめて長大な建物となる。ただし、伽藍中軸線の東西に配された2棟の建物の東建物にあたる可能性も残されている。この北方建物はその位置から判断して増坊とも考えられるが、講堂との間の広い空間利用のことも考えあわせると、この建物を増坊と断定することはさしひかえてお

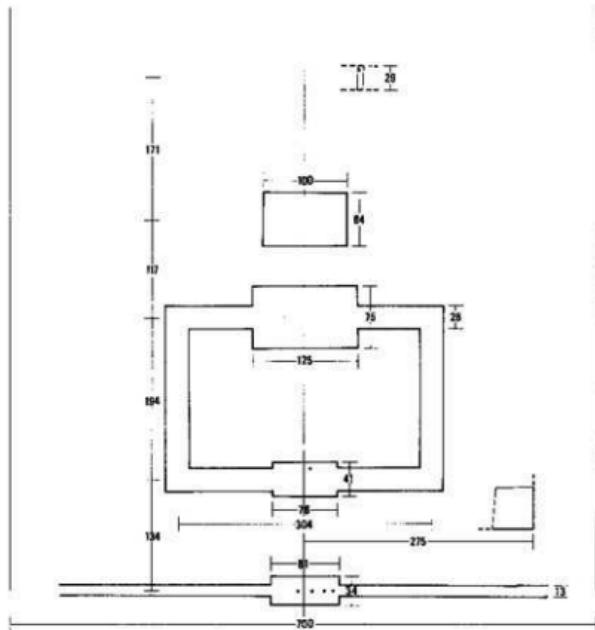


Fig. 8 伽藍配置概念図（単位=尺）

5

寺域を画する施設としては、南限で築地を確認したが、東限では溝を検出したのみである。東面築地がかつて存在したかどうか不明だが、この溝の西で検出した2個の柱穴を国分寺に関連する建物の一部と考えれば、築地の存する余地はなくなる。伽藍中軸線から溝中心までの距離が350尺という完数値をとることも、東面築地の存在を考えるうえで否定的なデータとなる。おそらく、東に丘陵が接しているので築地を省略したのではあるまいか。寺域東限を画する溝を伽藍中軸線を中心として西へ折り返した地点は、現存する南北に連なる水田畦畔とよく合致する。のことから、この線が寺域西限線と想定される。とすれば、寺域東西幅は700尺となる。寺域南北幅については、寺域北限を明らかにしていないので不明である。しかし、南面築地から北方建物基壇北縁までが、すでに631尺があるので、寺域南北幅も東西幅と同じく700尺程度と考えてよいだろう。従って、寺域はほぼ方2町と推定される。

四

- (1). 尺への換算は、本章小結で述べるごとく、造営基準尺を29.7cmと復元し、実測値をその基準尺で商した整数値を表示した。以下同様。
 - (2). 建物間の距離は特に注記しない限り、すべて心々距離で表わした。

IV 遺 物

4次にわたる発掘調査により出土した遺物は、瓦、埴、土器、鏡、鉄釘、石器などである。遺構に伴って検出された遺物は少數で、大部分は遺構検出面上層の堆積土から出土した。以下、瓦、埴、土器、その他の遺物にわけて記述する。

1. 瓦 嵌

瓦、埴はほとんどのトレンチで出土しているが、とくに4・8・13・24・27の各トレンチで多量の出土をみた。丸・平瓦の出土総数は麻袋650袋、破片数にして約10万点を数える。軒瓦、道具瓦、埴については、すべての個体について観察を加え得たが、丸・平瓦については任意に抽出した丸瓦22個体、平瓦94個体を観察したにすぎず、その他の膨大な量については、洗浄の過程で概観したのみである。また第4次調査で出土した丸・平瓦51袋は洗浄を行なっていない。⁽¹⁾以下現状での観察にもとづき、種類ごとに検討を加えたい。

A 軒丸瓦 (PL.16・17・28・29)

206個体出土した。瓦当文様によって分類すれば、主たる型式として3型式5種、その他の型式として2型式、計5型式7種にわけられる。

I型式 複弁8弁蓮華文。大型の中房内に1+8の連子を配し、複弁は中央に界線を伴い、各弁ごとに高く隆起した子葉をおく。細長い蓮弁の基部は中房をとりまく圓線に接し、弁端は内外区を画する圓線に接しない。外区内線は2重の圓線がめぐり、外線は内傾し、上面に平担部をつくる傾斜線の形状を呈し、その傾斜部に32個の外向凸鑿齒文を配する。蓮弁の形状によってa、b2種に細分される。a(PL.16-1)は間弁がY字形を呈するもので、平城宮6225型式⁽²⁾ときわめて類似する。b(PL.16-2)は間弁が楔形を呈し、aの転化したものとみられるが、他に類例はない。

瓦当部と丸瓦部との接合は、瓦当裏面に溝をほり、その部位に丸瓦をさしこみ、さらにその上下に厚く粘土をおいて行なう(PL.16-4)。接合線は円弧状と台形状の中間形態を呈する(PL.29-2)。丸瓦凸面は縱方向のヘラ削り調整が施される。凹面は布目が付着しているが、瓦当部付近は接合のため、なで調整によりすり消されている(PL.29-3)。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調黒褐色、焼成は不良である。

II型式 単弁16弁蓮華文。中房内に1+8の連子をおき、蓮弁中には彫りの浅い子葉をもち、その基部は中房をとりまく圓線に接する。外区は1重ないし2重の圓線がめぐり、外線は高く突出した上面に平担部をつくり、さらにその外側に狭い平担部をもつ。a・b2種がある。

a (PL. 16-3) は中房が大きく、弁幅が広く、かつ先端が丸い。その弁端は内外区を画する圓線に接する。外縁の狭い平坦部は大部分の個体で剥離しており、成形の際、後から貼り付けたものと思われる。b (PL. 17-1) は中房が小さく、弁が細く、かつ先端がやや尖りぎみとなる。外区は内外縁の区別がない。外縁の狭い平坦部は大部分の個体でよく残っており、a とは成形を異にするものと思われる。

瓦当部と丸瓦部との接合は I 型式と同様の方法で、接合粘土は比較的厚く、接合線は円弧状を呈する (PL. 29-4)。瓦当部の厚さは概して I 型式より薄い。丸瓦部凸面は縦方向のヘラ削りが施される。凹面は布目痕が付着するが、瓦当部付近は縦のなで調整によりすり消される。瓦当部と丸瓦部との接合部分に指圧痕が顕著にみられるものもある。胎土は細かい砂粒を多く含み、色調は黒褐色または赤褐色、焼成不良。

III型式 (PL. 17-2) 素弁 8 弁蓮華文。中房内は中心の蓮子をとりまいて、4 個と 8 個の蓮子を 2 重におく。蓮弁は 4 業ずつ卜ト 2 重に重ねた形態をとる。弁は大型で丸く、中に子葉をもたない。先端に反転を表わす楔形状の隆起がある。外区内縁は 2 重の圓線がめぐり、外縁は無文で直立する。この外縁の幅及び高さは一定しない。

造瓦技法はいわゆる一本作りで瓦当裏面から丸瓦凹面全面にかけて細かい布目痕が付着する（ただし、玉縁部端はヘラ削りによる面取りが施される）。布目痕は丸瓦凹面から瓦当裏面にかけて連続し、裏面中央に明瞭な布の綴じ合わせの縫い目が認められる。PL. 17-3 は全長のわかる唯一の個体であるが、それによると 329cm で他の玉縁式の丸瓦に比してかなり短かい。胎土は細かい砂粒を多く含み、色調灰褐色、焼成はやや良好である。

以上は主たる型式であるが、それ以外にそれぞれ 1 個体ずつの破片が 2 型式出土している。

IV型式 (PL. 17-4) 外区のみの少破片で、内縁には径 9mm、高 4mm の珠文を配し、外縁は剥離していてよくわからないが、傾斜線になるものと思われる。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調黒褐色、焼成不良。T-24 基壇検出面上層の微砂土中より出土した。

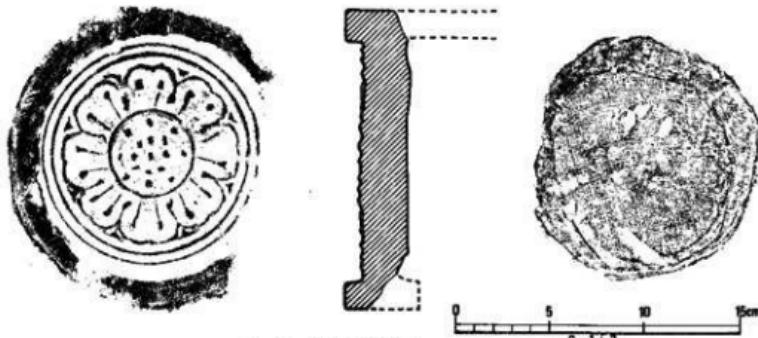


Fig. 9 豊丸瓦 V型式

V型式(Fig. 9) 複弁8弁速華文。瓦当部のほか完存する破片である。中房は1+8+8の蓮子をおき、複弁の中央には界線がなく、子葉が2個並列しておかれ。弁間には楔形を配する。また速弁基部が高く隆起する。外区内線は2重の圓線がめぐり、外線は広く高い線が直立する。瓦当裏面には細かい布目痕が付着する。丸瓦部はすべて剝離しているが、それとの接合部はなで調整が施されている。胎土は粗い砂粒が多く含み、色調は淡褐色、焼成は不良。T-35七坑底面より出土した。

各型式ごとの計測値はTab. 1のとおりである。

(単位:mm)

型式	直径	内 区				外区 広	外 区				全 長	正 縁 長	備 考			
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅		内 線		外 線							
							幅	文様	幅	高	文様					
I-a	159	56	1+8	115	26	F 8	22	6	K	16	5	RV 32				
I-b	160	56	1+8	114	25	F 8	22	6	K	16	5	RV 32				
II-a	170	60	1+8	106	18	T 16	32	9	K	23	6	/				
II-b	170	51	1+8	122	16	T 16	24	/	/	/	6	/				
III	163	54	1+4+8	123	43	T 8	20	5	K	15	5	/	329	30		
IV								13	S							
V	158	44	1+8+8	104	30	F 8	27	6	K	21	9	/				

Tab. 1 軒丸瓦計測表(F複弁、T單弁、K圓線、S珠文、RV凸凹齒文)

B 軒平瓦 (PL. 18-19-20-30-31)

194個体出土した。瓦当文様によって分類すれば主たる型式として2型式5種、その他の型式として5型式、あわせて7型式10種にわけられる。

I型式 均整唐草文。内区は花頭のまわりに中心葉を置き、その左右に3単位ずつの唐草を配する。外区は2重の孤線がめぐる。平城宮6663型式と同型式である。⁽²⁾ a・b・c・d・e 5種ある。a(PL. 18-1)は花頭基部が上界線に接し、中心葉が花頭端部に接しない。また各単位第2支葉が肉太である。少數ではあるが左ないし右端に窓型の割れのあるものがある(左右各3個体)。b(PL. 18-2)は中心葉が花頭端部に接し、かつ花頭端部の幅がaより広い。また中心葉の下端が著しく細くなっている。右第2単位を除く左右各単位の第2支葉がaより細い。c(PL. 19-1)はbと同様、中心葉が花頭端部に接し、かつa・bに比して線が細い。d(PL. 20-1)は1点のみの少破片で内区右第2単位と第1単位主葉の一部のみ存する。瓦当面厚さ、内・外区厚さともに他種より厚い。e(PL. 19-2)は花頭基部が上界線から離れ、中心葉が花頭端部に接する。右第3単位主葉と第2支葉との間に小さな支葉が入り、左右対称をくずしている。上・下外区にはすべて2重の孤線がめぐり、さらに個体によっては3重目の孤線がめぐるものがある。左右上端の文様部分が当初から欠落しているものがある。

a・bはすべて曲線顎である。凹面は比較的細かい布目で、糸切りの平行孤線が顕著なものがある。両側縁は面取りを施す。瓦当部付近は横もしくは斜め方向のヘラ削り調整が施され、その部分の布目がすり消される。凸面は観察可能のすべてが繩叩き目で、全面をなで調整によりすり消しているものもある。瓦当部付近は縱もしくは斜め方向のなで調整により、叩き目をすり消す(PL. 31-1)。側・端縁は入念にならる。凸面瓦当部付近に帶状に朱が付着しているものがある。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調黒褐色、焼成不良である。cは曲線顎。観察可能のものでは、凹面は布目で、瓦当部付近は横方向のヘラ削りが施され、側縁は面取りされる。凸面は顎部の一部に粗い繩叩き目が残存するが、平瓦部は縱方向のヘラ削りにより、全面叩き目がすり消されている。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調淡灰色、焼成不良。dは曲線顎で凸面に縱方向のヘラ削りが施される。凹面は残存しない。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調黒褐色、焼成不良。eは平瓦凸面に粘土を貼り付けて瓦当部をつくるもので、剥離した貼り付け部凹面に平瓦凸面の叩き目の陰刻がみられるものがある。凹面はやや粗い布目で、糸切りの平行孤線が認められるものがある。瓦当部付近は横方向のヘラ削りが施され、側・端縁は面取りされる。凸面は粗い繩叩き目で顎部にも同様の叩き目がある。成形の際、凸面の叩き目をほとんど消さない(PL. 31-2)。胎土は粗い砂粒を少數含み、色調灰色、焼成は堅密である。

II型式(PL. 19-3) ほぼ左右対称の唐草文で、左右両端から派生し、中心で2個の曲線文が組み合う。左右は1単位ずつで、きわめて退化したものとなっている。外区は3重の孤線がめぐり、外縁は広くかつ高い。瓦当面の反りが弱く幅も短かい。

顎は曲線顎である。凹面は細かい布目で、瓦当部及び側縁は幅1~2cmの狭い面取りを施す。凸面は粗いなでもしくはヘラ削り調整により、叩き目をすり消している。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調は灰色、焼成やや良好である。

以上は主たる型式であるが、それ以外に1~2点ずつの破片が5型式出土している。

III型式(PL. 20-3) 左右両端の2点のみの少破片である。瓦当文様はよくわからないが、均整唐草文の一類と思われる。顎部が剥離しているが、段顎と推定される。凹面は瓦当面ぎわまで粗い布目が残り、側縁は面取りが施される。凸面は粗い繩叩き目である。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調灰黄褐色、焼成は不良である。T-21及びT-22から出土した。

IV型式(PL. 20-6) 中心飾り付近と右端部との2点の破片で、均整唐草文と思われる。中心飾りは単線の花頭と過文状の唐草とからなる。外区は2重の孤線がめぐり、外縁は低く直立する。顎は浅い段顎とみられ、凹凸両面ともヘラ削りが施される。胎土は精製粘土で、色調灰色、焼成は不良である。T-35溝Ⅲ埋土中より出土した。

V型式(PL. 20-2) 少破片のため瓦当文様がよくわからないが、唐草文の一類と思われる。顎は段顎と思われる。胎土は粗い砂粒を少數含み、色調は黒褐色、焼成不良。T-22堆積土中より出土した。

V型式(PL. 20-4) 相対した2個の連L字状の中心飾りから左右に派生する唐草文。第I葉は左右対称にならない。外区の縁は広くかつ高い。額は下に大きく重れる。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調黄灰褐色、焼成不良。T-24基壇検出面上層の微砂質土より出土した。

VII型式(PL. 20-5) 少破片でかつ瓦当部の剥離が著しいので、文様はよくわからない。上外区は3重の弧線の外に、平坦で幅広い外縁がつく。下外区は3重の弧線が認められ、その下が欠損しているが、上外区と同様の外縁がつくものと思われる。瓦当裏面には細かい平行叩き目がみられ、平瓦部凹面は瓦当部端まで細かい布目が付着する。胎土は細かい砂粒を多く含み、焼成良好、明褐色を呈する。T-8から出土した。⁽⁴⁾

各型式ごとの計測値はTab. 2のとおりである。

(単位:mm)

型式	瓦当面												額の形態			備考		
	上弦幅	下玄幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	幅	脇区文様	脇区厚さ	文様の深さ	全長	直	曲	段	
I-a	272	71	275	52	21	KK	17	K	14	K	74	K	1.5	354	○			
I-b	267	68	272	51	22	KK	15	K	14	K	62	K	1.5	342	○			
I-c		60		51	21	KK	15	K	15	K		K	1		○			瓦当裏面剥離及び厚さは復元値
I-d				61	26	KK	16	K	19	K			1		○			
I-e	262	41	257	53	27	KK	15	K	11	K	41	K	1	325		○		
II	35	234	55	17	KK	18	K	20	K	75	K	2			○			瓦当裏面剥離及び下玄幅は復元値
III												K	1.5		○			額の形態は推定
IV						KK	15	K	14	K		K	0.5		○			内区文様は推定
V										9			2			○		
VI										20			2		○			
VII													0.5					

Tab. 2 斬平瓦計測表 (K 弧線 KK 均整唐草文)

C 丸瓦 (PL. 21-32)

少數の個体しか観察していないので、充分な形式分類を行えなかった。現状で、玉縁の有無及び全長ないし下縁長の長短を基準として、次の4種に区分した。

A種(PL. 21-1) 行基式のものである。全長321、幅160、高さ69、厚さ24を測る。凸面は全面で調整が施される。凹面は布目で、広縁縁は面取りされる。胎土は細かい砂粒を多く含み、焼成不良、黒褐色を呈する。この種は観察を加えた22個体のうち1個体のみであり、本遺跡においてはきわめて少數と思われる。⁽⁵⁾

B種(PL. 21-2) 玉縁式のものである。その中では全長が短かい。図示した個体は、全

長361、玉縁部長44、幅152、高さ72、厚さ21を測る。凸面は縱方向のなでもしくは横方向のへテ削り調整。凹面は布目で、糸切りの平行孤線が顯著なものがある。広端縁は面取りが施される。側面に分割の際の破面を残すものがある。胎土は細かい砂粒を多く含み、焼成不良で、淡褐色を呈する。

C種(PL. 21-4) 玉縁式で、玉縁部長の短かいものである。図示した個体は、全長378、玉縁部長26、幅154、高さ79、厚さ19を測る。凸面調整は縱方向のなで、玉縁部は横方向のなで。凹面は布目で、糸切りの平行孤線が顯著なものがある(PL. 32-4)。観察可能のものでは、広端縁に面取りを施さない。胎土は粗い砂粒を少數含み、焼成不良、黒褐色ないし灰褐色を呈する。

D種(PL. 21-3) 玉縁式で、全長の最も長いものである。図示した個体は、全長400、玉縁部長43、幅146、高さ72、厚さ16を測る。凸面は縱方向のなで、玉縁部に横方向のなで調整を施す。凹面は布目で、糸切りの平行孤線が認められるものがある。すべて端縁に面取りを施さず、両側縁に面取りを施すものがある。側面に分割の際の破面を残すものもある。胎土は粗い砂粒を少數含み、焼成不良、黒褐色ないし淡褐色を呈する。

D 平瓦(PL.22~24、33~35)

凸面の叩き目の種類によって次の4型式に分類した。

繩叩き目 a・b・c 3種ある。a(PL.22-1)は側縁に平行して、全面に刻されているものである。繩目はすべて細かく、軒平瓦I型式a・bの叩き目と同型式である。凹面は細かい布目で、側・端縁とも面取りが施されるが、まれに両側縁ないし広端縁の面取りを欠くものもある。多くは糸切りの平行孤線が認められる。胎土は粗い砂粒を多く含み、大部分焼成不良で、黒褐色ないし淡褐色を呈するが、まれに焼成堅緻で灰色を呈するものもある。b(PL.22-2)は繩目を全面に施すが、側縁に平行せず、斜め方向に叩かれているものである。叩き板原体は幅約40cmで、まず左中央やや上から右下にかけて、側縁に対してもほほ45°の角度で叩き、次に左上から右中央やや下にかけて、やや側縁に平行ぎみに叩く。凹面は布目で、成形の際の枠板の痕跡をもつ。枠板は幅約28cmである。側・端縁に面取りを施す。胎土は粗い砂粒を少數含み、焼成不良、黒褐色を呈する。T-4から出土した。c(Fig.10)は繩叩き目を全面に施さず、やや間隔をあけつつ、かつ方向を一定せずに叩かれている。叩き板原体は幅約25cmで、繩目はa・bよりも粗い。凹面は布目で側縁に面取りを施す。胎土は細かい砂粒を多く含み、焼成堅緻で、灰色を呈する。T-27から出土した。b・cは観察の範囲では、それぞれ1個体のみの出土であり、本遺跡においては例外的なものと思われる。

平行叩き目(PL.23) 側縁に平行して全面に施される。条線の間隔は5~11cmである。a・b 2種ある。a(1・2)は縦の平行条線のみのものである。凸面に糸切りの平行孤線が認められるものがある(1)。また凹面に枠板の痕跡をもつものが1個体ある(2)。枠板の幅は約27cm

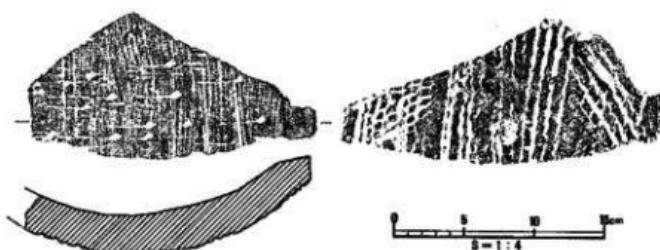


Fig.10 平瓦縄叩き目型式C

である。この個体は著しく厚い。b(3~5)は縦の平行条線に粗い格子目文ないし横方向の条線文を配するものである。格子目文のみのもの(4)、横方向の条線文のみのもの(5)、前2者を組み合わせたもの(3)があり、またこれらを全面に施したものや、部分的なものなどさまざまなバラエティがある。凸面に朱を塗布したものがいる。a・bとも凹面は布目で多くは糸切りの平行弧線が認められる。狭端縁のみ面取りを施し、他の縁は無調整のものが多い。胎土は粗い砂粒を少數含み、焼成不良、黒褐色ないし淡褐色を呈する。

格子叩き目(PL.24) すべて全面に施される。a・b・c 3種ある。a(2)は格子目が正方形ないし長方形を呈するもので、その対角線長は13mmから20mmまで個体によってさまざまである。b(1~4~6)は格子目が菱形を呈するもので、対角線長は9~24mm。c(3~5)は大型の菱形である。対角線長36~45mm。凹面は大部分細かい布目だが、まれにやや粗いものもある。完形品が皆無なのでよくわからないが、側・端縁に面取りを施すものと、それが狭端縁に限られるものとがあるらしい。胎土は粗い砂粒を少數含み、多くは焼成良好で、灰色を呈するが、中に焼成不良で淡褐色を呈するものもある。

無文(PL.24-7・PL.35-7) 叩き目をなでもしくはヘラ削り調整により全面すり消すものである。当初の叩き目を観察するものはない。凹面は細かい布目。観察可能のものでは、両側縁・狭端縁に面取りを施すが、広端縁は無調整である。胎土は粗い砂粒を多く含み、焼成良好、灰色を呈する。

以上の平瓦の製作技法は次の理由により、大部分一枚作りによるものと考えられる。⁽⁶⁾ ①、粘土に難目のあるものが発見されないこと。②、凹面布目に継ぎ目の例が発見されないこと。③、側面の分割断面が平瓦円弧の直径の方向を向かないこと。④、凹面に桶の桶板の痕跡がほとんどないこと。⑤、叩き目が叩きしめの円弧を呈さず、側縁に平行してつけられていること。⑥、桶巻作りでは広端部が叩かれにくいため、本遺跡の例では狭端から広端まで叩き目が通っていること。⑦、平瓦円弧の曲率が疑わしいこと。以上である。このうち④については例外がある。すなわち、PL.22-2、PL.23-2の平瓦が凹面に桶板の痕跡をもつてゐる。しかし、こ

の場合でも、後者が凸面の平行叩き目が狭端から広端まで通っていること、前者でも凸面の繩叩き目が斜め方向であるものの、叩きしめの円弧を呈さず、広端まで連続することなどにより、少なくとも桶巻作りの証左とすることはできない。

上記の平瓦のうち、繩叩き目 a は前述のように軒平瓦 I-a・b の平瓦部叩き目と同型式である。また、T-16 の金堂基壇化粧裏込土中及び T-24 及び T-26 の中門基壇土中にそれぞれ繩叩き目と平行叩き目の瓦片が混在している。従って、これらの型式については、美作國分寺創建期すなわち奈良時代中葉（後述 V 結語参照）に属するものと考えられる。格子叩き目と無文の型式については、判然としないが、恐らく繩叩き目と平行叩き目よりは後出のものと思われる。

E 道具瓦 (PL. 25・36)

道具瓦は鬼瓦・隅切瓦などが出上した。

鬼 瓦(2) 同一型式 2 個体の破片である。一は右端下部、他は左端やや上部の破片である。全体の文様は復元できないが、鬼面文ではないようである。内部に唐草文を配し、界線をはさんで、端部に径 25cm の大型の珠文を置く。厚さ 42mm。裏面及び端面はなでもしくはヘラ削り調整を施す。胎土は粗い砂粒を多く含み、焼成不良、黒褐色を呈する。T-33 と T-8 とから出土した。

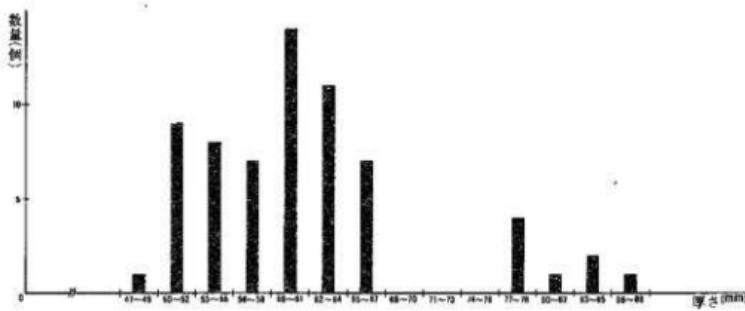
隅切瓦(1) 1 個体のみである。広端部片側を焼成前にやや内湾ぎみに切り取る。凹面は布目で糸切りの平行弧線が認められる。側・端縁は面取りを施す。凸面は繩叩き目 a である。胎土は粗い砂粒を多く含み、焼成不良、黒褐色を呈する。T-24 基壇検出面下層の緑褐色微砂土層より出土した。

他にあるいは鶴尾ではないかと思われる破片が若干あるが、判然としない。

F 塚 (PL. 25・36)

115 個体出土した。正方形及び長方形のものがある。完形のものは T-3 土坑底に転落していた 5 個体に限られるので、形状による分類は行いえなかった。そこで厚さを基準として区分した。すなわち、厚さ計測可能のもの 65 個体を 3cm 単位でグラフにしたもののが、Tab. 3 である。これによれば、47mm から 88mm までさまざまであるが、68mm から 76mm までのものがない。従って、これらは 47-67mm のもの (A) と 77-88mm のもの (B) との 2 群にわけられる。A 群 (PL. 25-4 ~ 6) は 57 個体で 88% をしめる。59-61mm にピークがある。隅切のもの (4) が 4 個体ある。B 群 (PL. 25-3) は 8 個体で 12% をしめる。77-79mm のものが最も多い。両群とも粗い砂粒を多く含み、焼成不良、黒褐色ないし淡褐色を呈する。

塚はほとんどのトレンチで出土している。3・4・5・8・13・21・24・27・35 の各トレンチで 5 個体以上出土しており、これらの総計で全体の 74% をしめる。特に T-4 では 23 個体出土しており、これだけで全体の 20% に達する。しかし、これらのトレンチは概して瓦の出土量



Tab. 3 塙の厚さ

の多い地点であり、上記の事実から分布上の特徴をひきだすことは困難である。

G 軒瓦の諸問題

型式別分布とその特色 軒瓦は軒丸瓦が206個体、軒平瓦が194個体、合計400個体出土している。軒丸瓦と軒平瓦の出土比率はほぼ同じとみてよいだろう。4・8・13・24・27・31の各トレンチで集中的な分布がみられ、これらの合計で全体の64%を占める。瓦の形式ごとの分布を示したもののがTab. 4である。これらの軒瓦は大部分遺構検出面上層の堆積土中もしくは固分寺廃絶後の遺構から出土したものであり、もとの建物の屋根から落下した状態を維持しているものはほとんどない。従って、この表に示された分布を過大評価することは誤りである。しかし、瓦の性格上、特別の事情のない限り、落下した原位置を大きく移動することはないと思われる所以、表に示された分布はおおよそその瓦の原位置を示していると考えてよいだろう。

表によれば、軒丸瓦I型式の全軒丸瓦に対する比が42%、II型式が34%、III型式が20%、IV型式及びV型式が1%、型式不明3%で、I、II、IIIが主たる型式であることが知られる。I型式の中ではI-bが全軒丸瓦に対して24%の比率を示し、かつa・b判別不能のもの14%のうち、大部分がI-bであろうから、この比率はさらに高くなる。従って、I型式ではI-bが主体である。II型式ではII-aが26%を示し土体を占める。軒平瓦では、I型式が87%、II型式が10%、III型式からVII型式まではあわせて3%で、I及びIIが主たる型式である。I型式の中では、I-cが3%、I-bが0.5%で土体から除外され、他のI-a、I-b、I-eがそれぞれ17%、30.5%、12%で、いずれも量的な出土がみられるが、わけてもI-bがやや群を抜く。

次にトレンチごとの傾向をみると、軒丸瓦I及びII型式と軒平瓦I型式は全体にくまなく分布する。これはこれらの型式が、調査を行った主要建物のはばすべてに使用されていることを示している。ところが、軒丸瓦III型式と軒平瓦II型式については、著しく様相を異にする。

(単位:個)

型式 シレンナ	軒 丸 瓦										軒 半 瓦								
	Ia	Ib	I	IIa	IIb	II	III	IV~V	不明	小計	Ia	Ib	Ic	Id	Ie	I	II	III~IV	小計
T-1										0		1							1
T-2			1	1						2									0
T-3			1							1		1							1
T-4	3	4	2	2	1	1	30			43	4	4	1			4	6		19
T-5	1		1						1	3	2	2				3	2		9
T-6			1							1									0
T-8	5	6	3							14		11			1	3		1	16
T-9										0					1				1
T-10	1									1	1								1
T-11	3	2	3	2	1					11		2			1	1			4
T-12	1	1	2						2	6					2	1			3
T-13	2	2		3	1	6				14	10	9			10	8	9		46
T-14										0	1								1
T-16		1			2					3	2				2	1			5
T-17	1									1									0
T-18	2		1							3	1								1
T-19		1							1	2						1			1
T-20	1	1								2	1	2							3
T-21	2	1	2	1	1	1				8		1			2	1			4
T-22	4	6	1							11		1			1		2		4
T-23		1	3		1					5	2	3			1	3			9
T-24	2	4	11	5	2		1			25	5	6	2		4	10		1	28
T-25		1	1		1					3									0
T-27	6		12							18	1	4	1		1	1			8
T-29										0		2							2
T-31	11	1	5						3	20	1	2	1		1				5
T-32	2		2							4		2			1				3
T-33										0		4							4
T-35	1					1			2						1	1		2	
不明	1		1	1						3	2	2		1	2	5	1		13
合計	9	50	28	54	10	6	40	2	7	206	33	59	5	1	23	47	20	6	194
比率(%)	4	24	14	26	5	3	20	1	3	100	17	30.5	3	0.5	12	24	10	3	100

Tab. 4 軒瓦の型式別分布

すなわち、軒丸瓦Ⅲ型式40個体のうち、75%がT-4に集中するのである。これに13・16・25の各トレンチを加えれば全体の98%に達する。これらのトレンチはいずれも金堂もしくは講堂の調査区である。また軒平瓦Ⅱ型式は全部で20個体のうち、金堂もしくは講堂の調査区である4・5・13・16の各トレンチに90%が集中する。従って、これらの型式の瓦は主として金堂及び講堂に使用されたものであろう。

他遺跡との同範関係 美作国分寺跡出土軒瓦のうち、一部の型式については、美作の他の寺院跡ないし官衙跡出土瓦との間に同範関係が認められる。Tab.5はこれらの関係を表示したものである。⁽⁹⁾

型式	軒 丸 瓦		軒 平 瓦			
	I-a	II-a	II-b	I-a	I-b	I-e
美作国分尼寺跡				○		
美作国府跡	○	○		○		
平遺跡					○	
久米庵寺			○			○

Tab.5 美作国分寺跡出土瓦との同範関係

美作国分尼寺跡からは軒平瓦I-aを出土する。⁽⁹⁾ 成形・調整・焼成などすべての点で国分寺跡出土のものと同一である。美作国府跡からは、軒丸瓦I-a及びII-a、軒平瓦I-aと同範瓦が出土する。このうち軒丸瓦I-aは焼成良好で灰色を呈し、国分寺跡出土のものとは焼成を異にする。勝田郡勝央町平遺跡は勝田郡衙と関連する遺跡と考えられているが、ここからは軒平瓦I-bと同範のもの

が出土している。ただし凸面叩き目は粗い平行叩き目で、I-bがすべて繩叩き目であるとは異なる。久米郡久米町久米庵寺は久米郡衙跡と推定される宮尾遺跡に西接する遺跡で、郡衙に開連する寺院と推定されている。ここからは軒丸瓦II-b及び軒平瓦I-eと同範瓦が出土している。前者は久米庵寺軒丸瓦Ⅳ類とされているものであるが、1個体のみの出土で同庵寺の主体をなすものではない。後者は軒平瓦Ⅴ類で、瓦当面が完存しないため断定できないが、ほぼ同範に誤りないと思われる。これも1個体のみの出土で主たる型式ではない。⁽⁹⁾

以上の遺跡はすべて勝田郡・苦出郡・久米郡のいずれかに属する。従って美作国分寺跡出土瓦との同範関係は、美作国中央部の限られた地域にのみみられる現象である。また、これらの同範瓦の一部は、成形技法や焼成において美作国分寺跡出土瓦とは様相を異にしており、必ずしも一ヶ所から一元的に供給されたものではないらしい。

組み合わせと編年 軒丸瓦・軒平瓦の主たる型式についての相対編年から検討を加えたい。まず軒丸瓦であるが、I-aは平城宮6225型式ときわめて類似し、最も本源的なものと思われる。I-bはI-aの間弁と弁間の界線を楔形状に変形したものであり、複弁ではあるが、一見単弁風となる。II-aはI-bの複弁を単弁に変え、かつ外縁の鋸歯文を省略したものとみられる。II-bは圓線を一重に変えたものである。従って、これらの相対編年はI-a→I-b→II-a→II-bの順となり、かつてわめて連続的に理解しうるのである。ⅢはI・IIとは連続的な変化を見出しえない。

軒平瓦では I-a・b が平城宮6663型式と最も近似し、本源的なものと思われる。6663型式はすべて中心葉が花頭端部に接しないので、a がより古相を示すものであろう。I-c・d は線が弱く、a・b のやや退化したものとみなされる。I-e は文様が最も乱れており、I 型式の中では最も後出的なものであろう。II は中心飾りがなく、両端から派生するもので、I とは直接的に連続しない。

次に組み合わせであるが、軒丸瓦 I 型式と軒平瓦 I 型式との組みは平城宮の例から明らかであろう。中でも出土量の多い軒丸瓦 I-b と軒平瓦 I-a・b とが基本的組み合わせとなろう。次に軒丸瓦 II 型式と軒平瓦 II 型式は、瓦当面外縁の発達、凹面布目、焼成などの特徴が一致することや、いずれも金堂及び講堂に集中することなどから、組み合いは疑いえないであろう。そうすれば、軒丸瓦 II 型式と組み合う軒平瓦がなくなるが、軒平瓦 I 型式はかなりの年代幅が考えられるので、恐らくその後出的なもの、I-e などと組み合うのである。

最後にこれらの絶対年代を検討しておこう。軒丸瓦 I 型式と軒平瓦 I 型式との組み合わせは、^前平城宮「第2次朝堂院」所用瓦と同型式であり、奈良時代中葉の年代が与えられる。軒丸瓦 II 型式と軒平瓦 I-e などとの組みは、軒丸瓦の弁が単弁化すること、外区外縁が密文化することなどから、奈良時代末ないし平安時代初頭と考えてよい。さらに、軒丸瓦 III 型式と軒平瓦 II 型式との組みは、ほぼ平安時代中葉ないし後半と考えられる。すなわち、軒丸瓦 III 型式は11世紀後半と考えられる平安宮大極殿出土瓦の弁の上下に重なる型式と類似し、かつそれより古い様相を呈する。^前また軒平瓦 II 型式は11世紀後半とされる両端から派生する唐草文をもつ平安宮出土瓦と親縁関係にある。以上によれば、この組み合わせは11世紀後半をややさかのほる年代が与えられるが、地域差を考慮して平安時代中葉ないし後半とするのが穏当であろう。

その他の型式については、組み合わせは全く不明である。絶対年代は、軒丸瓦 V と軒平瓦 VI・VII がいずれも外区外縁の特徴などから、ほぼ平安時代末のものと考えられるのに対し、軒丸瓦 IV と軒平瓦 III・IV・V については、判然としないが少なくとも平安時代末までには下らないものであろう。

2. 土器

美作国分寺跡出土土器は弥生時代から近・現代にまで及ぶが量的には非常に少なく、小破片が大部分をしめ、復元可能なものは微量である。これらの遺物の大半は現地表面から遺構検査面までの間に混在して包含され、層位的出土による遺物の新旧関係は全く把握できなかった。また国分寺跡遺構出土遺物も、T-23南門雨落溝を除き皆無に等しい。当然、日常雜器類のセット関係は知るすべもない。このように一括遺物による良好な資料に恵まれなかつたことに加え、この期における周辺諸地域の土器研究は十分進んでいるとは言い難く、その年代についても推定の域を出ない。本項では、これらの遺物の中から国分寺存続期間に関係すると考えられるも

のを選び出し、検討していくこととする。

須恵器(PL. 26-1~16・18~20・22・23, 37-1~3・5) 1~5は壺の蓋である。1~3は退化した宝珠形のつまみのつくものである。4・5は端部破片であるが、同様の形態のものと考えられる。いずれも堅鐵である。2は上面に自然釉がかかっている。6~8は高台のつく壺である。8は他と比べ深い杯部をもつ。6・7は焼成良好で青灰色を呈す。8は淡灰色を呈し、軟質な感じをうける。9は外傾した高台をもつ堅鐵な椀である。外面は淡黒色、内面は灰色を呈す。10は壺の口縁部、11・12は底部破片である。10は焼成良好で内外面に淡緑色の自然釉がかかっている。11は低い高台がつき、色調は灰白色を呈す。12は青灰色を呈し、やや軟質な感じをうける。13は水瓶の肩から胴にかけての破片と考えられる。肩部に1本、胴部に2本の沈線がめぐる。色調は淡灰色を呈し、やや軟質な感じをうける。14は甕の口縁部破片である。暗灰色を呈す硬質土器である。15・16は青灰色を呈し、外面口縁直下に淡黒色の重ね焼きの痕跡を残す。底部はほぼ平らで、口径に比べて大きく、口縁にかけて急角度で立ち上がる。底部は回転ヘラ切りである。6・7の壺に比べ、やや軟質な感じをうける。18~20・22・23はいずれも回転ヘラ切りの底部を有す。18は内外面、19・20は内面、22・23は口縁部内外面に黒色付着物が認められる。これは灯明皿として使用した際のススの痕跡だろうか。18は他と比べ丸味を帯びた底部となっている。22・23は重ね焼きの際、間にワラをおいたためにできた褐色の火だしきを内外面にそれぞれ数本づつ残している。

土師器(PL. 26-17, 27-1~6・8, 37-6・7・9) 17は精製した粘土を用いた壺である。色調は内外面ともスス・タール状物質の付着により黒褐色を呈す。底部は明瞭な平底を形成せず、丸味を帯びている。暗文・ヘラミがき調整は施されていない。1~3は回転ヘラ切り、4~6は回転糸切りの底部を有する壺である。6は回転糸切り底をもつ小皿、8は高台付椀である。これらは一般的に胎土に砂粒を含み、ざらざらした肌ざわりである。1~3は暗黄褐色を呈す。4は内面黒褐色、外側は暗褐色で内面には、スス・タール状付着物が認められる。4は糸切り底に高台のつく壺であるが、高台は削がれて、中心部だけに糸切痕をとどめている。5は褐色、6・8は赤褐色を呈す。8は保存状態が悪く器壁が剥落している。

綠釉陶器(PL. 27-10) 口縁部と底部の接合しない小破片であるが、同一個体の高台付椀と考えられる。口縁部直下に1本の稜線をもつ。色調は綠釉がやや剥がれ、素地の暗灰色が目立つ緑灰色を呈す。図示したもの以外には、小破片が1点出土している。

灰釉陶器(PL. 27-11・12) 11は口縁部、12は底部をそれぞれ欠く破片である。11は内面に淡黄褐色の釉がかかること。焼成良好で堅鐵である。12は内面と外面口縁直下に淡黄緑色の釉がかかる。11は高台付椀、12も恐らく高台付の椀と考えられる。

墨書き土器(PL. 38-2) T-8南門雨落溝から出土した。底部破片であるが、復元径は6cmをはかり、回転ヘラ切り底を有す。文字数は2文字と推測される。上の字は判読不能である。

が下の字はおそらく「福」と考えられる。

次に国分寺廃絶後の土器類について簡単にふれておくことにする。ここに取り上げたものは廃絶の時期により近いと考えられるもの、比較的年代のおさえられるもの、講堂の基壇を切っているT-3土坑出土土器を対象とした。

^{勝田焼}(PL. 27-13-15) 青灰色を呈す硬質土器である。回転糸切り底を有するのが特徴である。13・14は环、15は小皿である。小皿外面口縁直下には重ね焼きの痕跡を残す。

土師質土器(PL. 26-21, 27-7・9・16-19, 37-8・10-14) 21・16-18は环である。底部はいずれも回転ヘラ切りである。胎土はやや砂質にとみ、ざらざらしている。16-18は国分寺存続期のそれと比べ、深い环になることが指摘できる。7は高台付皿である。胎土は砂質にとみ、色調は暗黄褐色を呈す。焼成は良好である。9は高台付环である。色調は灰白褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。やや高めの高台がつく。19は小皿である。色調は褐色を呈し、焼成良好である。底部にはヘラ切り痕を大きく残している。

白 磁(PL. 27-20-22) 20は楕口縁部、21は楕底部、22は皿口縁部のいずれも小破片である。色調は21・22が乳灰白色、20は淡黄白色を呈す。胎土は精緻である。20は口縁部を外側に折り曲げるいわゆる玉縁状口縁である。

T-3土坑出土土器(PL. 27-23-27) 23-26は土師質土器、27は備前焼である。23は赤褐色を呈す非常に軟質な环である。24-26は灯明皿として使用されたものである。24は内外面とも黒色、25・26は灰白色を呈し、口縁部にスヌの付着をみる。いずれも底部回転ヘラ切りである。27は腹底部である。焼成堅敏で色調は赤褐色を呈す。胎土には大粒の砂粒を含む。

以上、個々の土器について概観してきたが、これらをまとめてみると、大きく3群に分けることが可能であろう。すなわち、PL. 26-1-14の青灰色を呈す硬質須恵器の一群。これに対応する土師器の存在は確認されなかったが。次に、PL. 26-15-20・22・23、27-1-6・8の須恵器・土師器の一群である。残りの一群は勝田焼以降の土器群である。以下、各土器群ごとの年代について考えてみよう。

第1群土器(PL. 26-1-14) 第1群土器として図示したものは全て須恵器である。当然、土師器も存在するが、小破片で図示できるものはない。退化した宝珠形の扁平なつまみをもつ蓋、セットとなる高台付环の垂直に立つ低い高台などは、これらの中でも比較的古い様相と考えてさしつかえないだろう。国分寺以降、最初に登場するこれらの土器を奈良時代末頃と推定した。これに対して、高台付楕の外側する高台などやや新しい要素も指摘できる。この時期を平安時代初頭と考えた。これらはいずれも青灰色を呈し堅敏である。

第2群土器(PL. 26-15-20・22・23、27-1-6・8・10-12) T-23南門雨落溝出土土器を指標とする。須恵器环(PL. 26-15・16)は第1群土器にくらべ、やや軟質化する傾向

にある。この杯には高台はつかず、蓋はセットにならないと考えられる。この時期以降、通常行なわれる須恵器・土師器の分類が不明瞭になる。須恵器の胎土には微砂粒を含み、ざらざらした感じをうける。焼成は悪くさらに軟質化する。色調は灰白色、灰褐色を呈す。底部は回転ヘラ切り、回転糸切りの2種類がある。土師器坏も砂粒を多量に含み焼成は悪い。色調は赤褐色、褐色を呈す。PL.26-17を除き、他は全てロクロ成形である。底部は回転ヘラ切りと回転糸切りの2種類が認められる。この第2群土器とした土器の中には、平安時代末頃から鎌倉時代に属すると考えられている勝田焼が含まれていないこと、第1群土器より後出のものとの考え方から、平安時代後半に比定した。また、PL.26-15・16の須恵器坏は第2群土器の中でもやや古い様相をもつものと考えられることから、平安時代中頃に比定されるのではなかろうか。綠釉陶器、灰釉陶器もこの第2群土器の中に含まれよう。

第3群土器(PL.26-21、27-7・9・13-27) 平安時代末から鎌倉時代にかけて美作地方を中心に広く分布すると考えられている堅緻で青灰色を呈す底部回転糸切りの土器、すなわち勝田焼以降の土器である。勝田焼はT-23南門雨落溝出土土器に含まれないことなどから、この時期には国分寺は廃絶されていたものと考えられる。遺構の切り合いで廃絶を示すT-3土坑出土土器は、備前焼などから考えて、室町時代頃と考えられよう。

これらをまとめると、第1群土器は奈良時代末から平安時代初頭、第2群土器は平安時代中頃から平安時代後半、第3群土器は平安時代末以降中世という年代観が得られよう。

3. その他の遺物

八稜鏡(Fig.11, PL.38-3)

講堂T-3の基壇外堆積土中から出土した。ほぼ半分を欠損しているが、保存状態は良好である。直径は鏡頂で76.9mm、鏡底で69.4mmをはかる。内区の直径は50.1mmあり、厚さ1.3mmから0.7mm。全体に雑なつくりで、鏡の頂部を丁寧に研磨している。内区には、鏡を中心として一方に鳥文らしい文様が認められ、相対する位置に瑞花が配されたと推定できる。鑄上がりは全体として悪く、ムラがあり、軸1.7



Fig.11 八稜鏡

mmの細線単圓は部分的に消失している。外区には稜頂に対する位置に4ヶ所文様らしい高まりが認められる。外縁は薄鉢式の三角縁で、縁辺部をヤスリ状のもので荒く仕上げており、条痕を残している。平安時代後期のものであろう。

石 帯(Fig.12、PL.38-5)

中門T-24の遺構検出面を覆う中世の整地土層から多量の瓦に混じって出土した。淡緑色の蛇紋岩製と考えられる。節理面にそって半分近くを欠失しているが、無文で方形の巡方である。各面とも丁寧に研磨し、裏面には常に装着するための潜穴が2ヶ所残るが、本来は4ヶ所存在したと考えられる。裏面縁辺部

には面取りを施している。幅27.7mm以上、高さ30.2mm、厚さ6.8mm。

その他、金屬製品として釘および針金が出土した。釘は各調査区にわたり出土しているが、数は少ない。針金は銅製と考えられるもので、小断片がT-4から出土している。

註

- (1). 瓦類の部分名称、分類称呼法、成形技法等については、基本的に下記の研究に依拠した。
また瓦類一般については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第3調査室の諸氏の御教示を得た。
奈良国立文化財研究所『基準資料I(瓦編I)』(1974)
同 上 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』(1976)
佐原 真「平瓦桶巻作り」(『考古学雑誌』58卷2号、1972)
- (2). 奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』(1978)
- (3). 小林行雄『統古代の技術』(1964)、田辺征夫「瓦」(甘粕 健編『考古資料の見方(遺物編)』、1977)
- (4). 瓦当面積幅は右を計測した。
- (5). 計測数値はいずれもmm単位。またすべて最大値を計測した。以下同様。
- (6). 小林行雄前掲書、佐原 真前掲論文。
- (7). 表のうち、軒丸瓦IはI型式ではあるが、aかbかの判別ができないもの。軒丸瓦II、軒平瓦Iについても同様の趣旨による。また、7・15・26・28・30・34・36の各トレンチは、軒瓦を出土しない。なお暗渠排水トレンチから出土したものは、母トレンチに含めた。

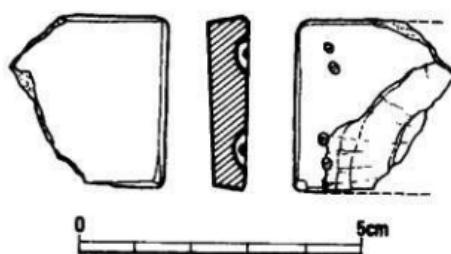


Fig.12 石帶

- (8). I-a と I-b の合計59個体のうち、bは50個体で85%を占める。このことから、a・b 判別不能のもの28個体についても、その大部分は I-b であることが類推できる。
- (9). 平遺跡及び久米庵寺出土瓦については、岡山県教育委員会の御厚意により実見させていた だいた。なお、その際、伊藤 晃氏の御教示を得た。
- (10). 津山市教育委員会『図録津山の史跡』(1978)、P.25。津山市教育委員会所蔵資料である。 発掘資料でなく、出土の経緯はよくわからない。
- (11). 岡山県教育委員会「美作国府」(『岡山県埋蔵文化財調査報告6』、1973)、P.49-第13図及び 図版36、津山市教育委員会前掲書、P.20。
- (12). 岡山県教育委員会「平遺跡」(『岡山県埋蔵文化財調査報告8』、1975)、P.214、図版24-7 D。
- (13). 岡山県教育委員会「久米庵寺」(『岡山県埋蔵文化財調査報告4』、1973)。
- (14). 同 上 「久米庵寺(補遺編)」(『岡山県埋蔵文化財調査報告24』、1978)、美作国 分寺跡出土瓦と同范の指摘がある。
- (15). 同 上
- (16). 平城宮6225、6663型式の組み合わせは、平城宮第II期すなわち養老～天平年間とされてい る(奈良国立文化財研究所『基準資料II』)。しかし、国分寺との関連でいえば、軒丸瓦I・ 軒平瓦Iにこの年代をそのまま与えることはできない。国分寺造営が命じられた741年以 後であることは動かしがたい。これらは、奈良時代中葉における現実の「第2次朝堂院」所 用瓦を模したものであろう。
- (17). 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」(『古代研究13・14』、1978)、P.38第9図1 ～5・9、なお氏の御教示を得た。
- (18). 同 上、P.4、第1図3～5
- (19). 須恵器、土師器の分類についてふれておきたい。須恵器において退化した扁平な宝珠形の つまみをもつ蓋とセットになる高台付坏の段階までは、土師器との区分けは明確である。この 時期は奈良時代末と考えられる。美作国分寺跡においては、この時期以降平安時代に入ると、 須恵器は全体的に軟質となり、高台もなくなる。恐らく蓋はセットとならないと考えられる。 この段階頃より、通常行なわれる須恵器・土師器の分類が不明瞭となる。すなわち、ロクロ 成形による灰白褐色軟質土器群の存在である。これは、単に焼成不良に起因するものとは考 えられない。従って、分類にあたっては、これら一群の中で色調に着目し、青灰褐色を呈し ているものを須恵器とし、灰白褐色を呈しているものを土師器とした。

V 結語

最後に、遺物とくに瓦からうかがうことのできる美作国分寺の歴史を概観し、結びにかえた
い。

創建期に使用された軒瓦は、軒丸瓦Ⅰ型式と軒平瓦Ⅰ型式 a種・b種の組み合わせで、奈良時代中葉のものと考えられる。従って、創建は国分寺・国分尼寺造営の詔が出された天平13(741)⁽¹⁾年をはなはだしく下らない時期とみなされる。この組み合わせの軒瓦は出土量が最も多く、軒丸瓦Ⅰ型式が全軒瓦の42%、軒平瓦Ⅰ型式の a種及び b種が全軒平瓦の47.5%と全体のほぼ半ばを占める。そして、これらの瓦は軒瓦の出土するトレンチのほとんどから出土しており、しかも特に集中して出土する地区はみられず、ほぼ均等な分布状況を示している。これらの事実から、奈良時代中葉の創建期における一連の造営事業のなかで、主要伽藍のほとんどが完成されたと推定される。

奈良時代末ないし平安時代初頭と推定される軒丸瓦Ⅱ型式と軒平瓦Ⅰ型式 e種などとの組み合わせは、軒丸瓦Ⅱ型式が34%、軒平瓦Ⅰ型式 e種が12%となる。この出土比率からみて、これらの瓦は単に差し替え用とみるよりも、何らかの建物修復工事に伴なうものとみるべきであろう。とくに、軒丸瓦Ⅱ型式の51%が中門の調査区であるT-11・24・27から出土し、中門に集中する傾向がうかがわれることと、中門基壇に認められた修復工事を考え合わせれば、その修復工事の年代は明確ではないが、おそらく、奈良時代末ないし平安時代初頭に中門を中心として主要伽藍の修復が行なわれたのではないか。

軒丸瓦Ⅲ型式と軒平瓦Ⅱ型式の組み合わせは、平安時代中葉ないし後半に比定され、軒丸瓦Ⅲ型式が20%、軒平瓦Ⅱ型式が10%とかなりの出土量がある。これらの型式は、金堂・講堂の調査区に極端に集中しており、金堂及び講堂に使用されたものと考えてさしつかえない。この事実から、平安時代中葉ないし後半に金堂・講堂が補修されたとみてよいのではなかろうか。

その他の型式の軒瓦として、軒丸瓦がⅣ型式とⅤ型式の2型式、軒平瓦がⅢ型式からⅦ型式までの5型式がある。これらはいずれも1~2点の出土である。時期は奈良時代から平安時代末まで及んでおり、創建期以降、隨時、修復に使用されたものであろう。

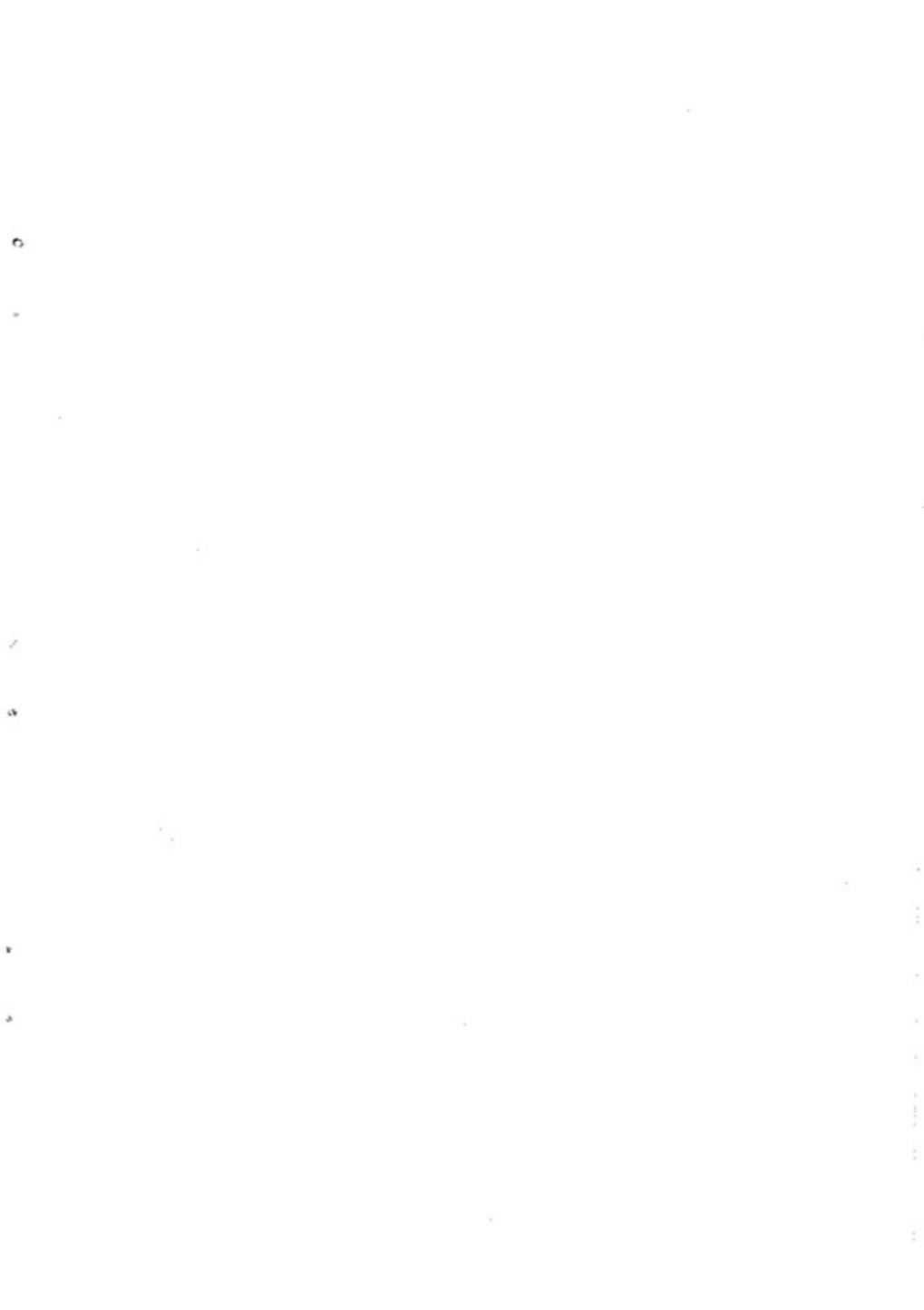
鎌倉時代以降に下る瓦は出土していない。また、建物に付属する雨落溝では、わずかに南門東南隅雨落溝のみ伽藍廃絶時の堆積層が確認されたが、この溝出土の土器は平安時代後半のものに限られる。これらの事実から、国分寺は平安時代末頃に廃絶したものと推定される。

註

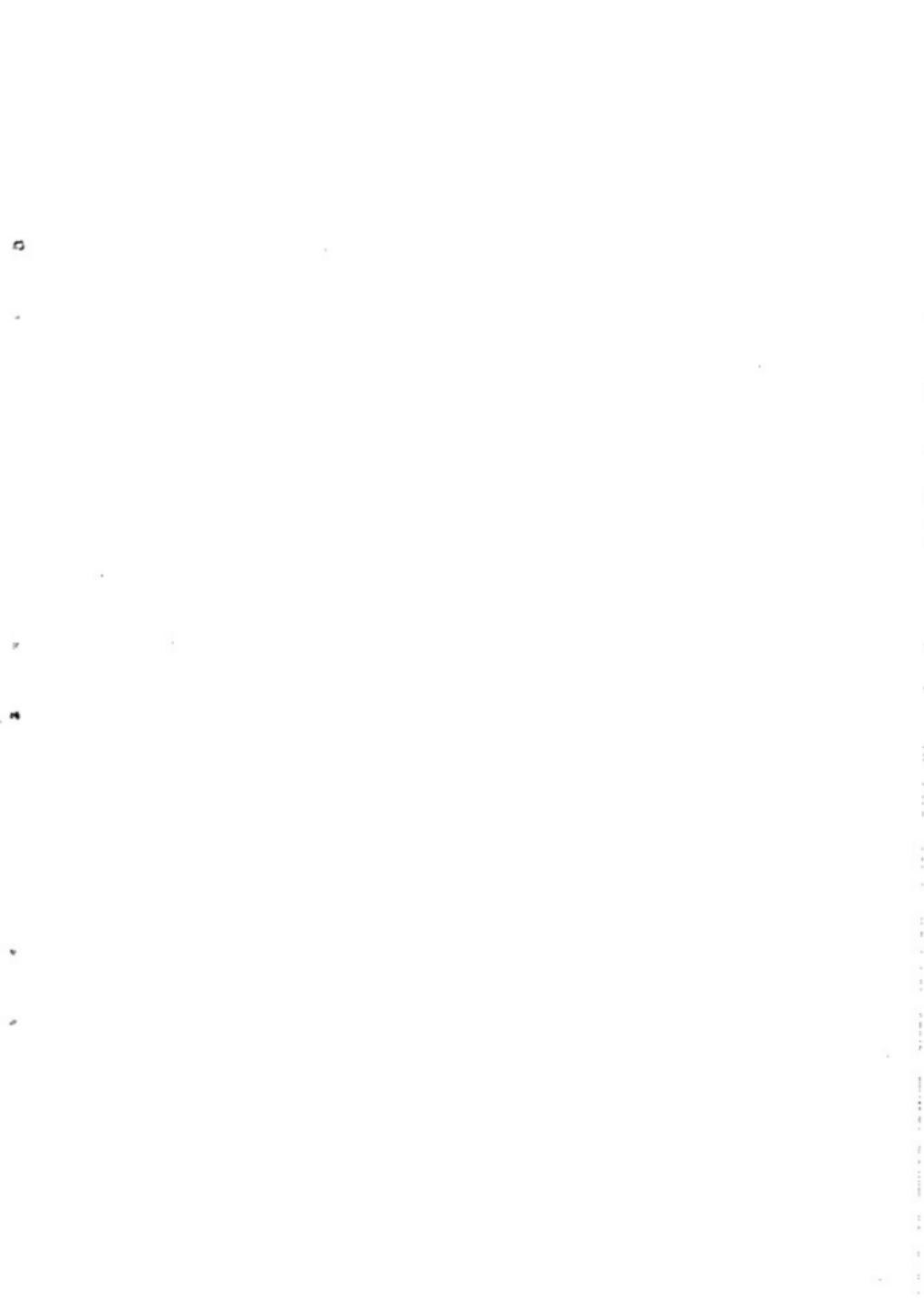
(1) 美作国分寺の創建については、続日本紀天平勝宝8(756)歳12月己亥条の記事が注目され

る。すなわち、美作を含む越後等26国に明年の聖武上皇の1周忌法要のため、仏具を領布し、法要が終われば金光明寺すなわち国分僧寺に収め置いて、永く寺物とせよとの命令が出されている。この記載によれば、756年当時すでに美作国分寺がある程度完成していたとも解される。筑後等九州6ヶ国国分寺創建についての上と同様の指摘は、小田富士雄「国分寺の成立」(『九州考古学研究〈歴史時代篇〉』1977) にある。

- (2). T-6とT-9からは、創建期軒瓦の組み合わせは出土していない。しかし、これらのトレンチからはそれぞれ軒瓦1個体が出土するのみである。

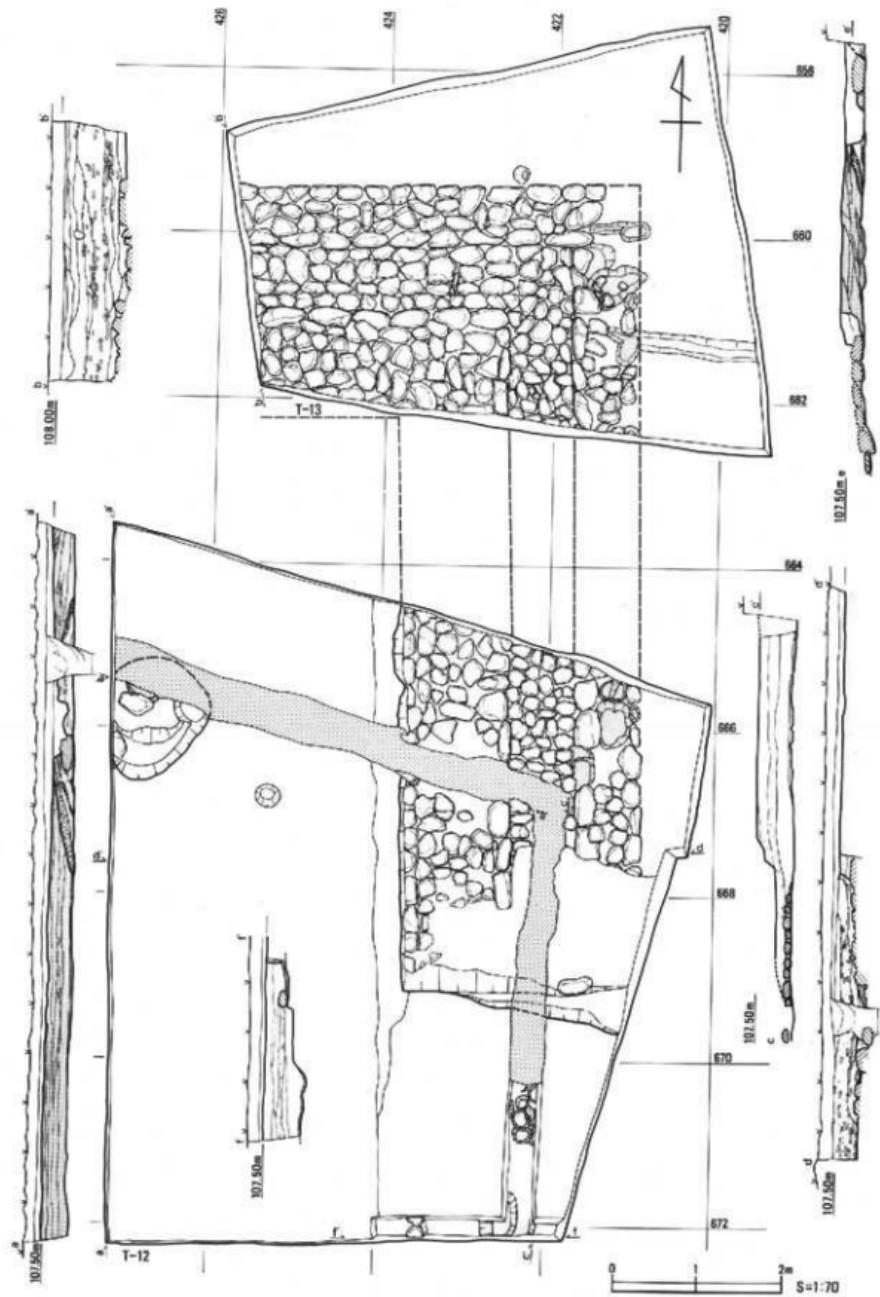


図面・図版

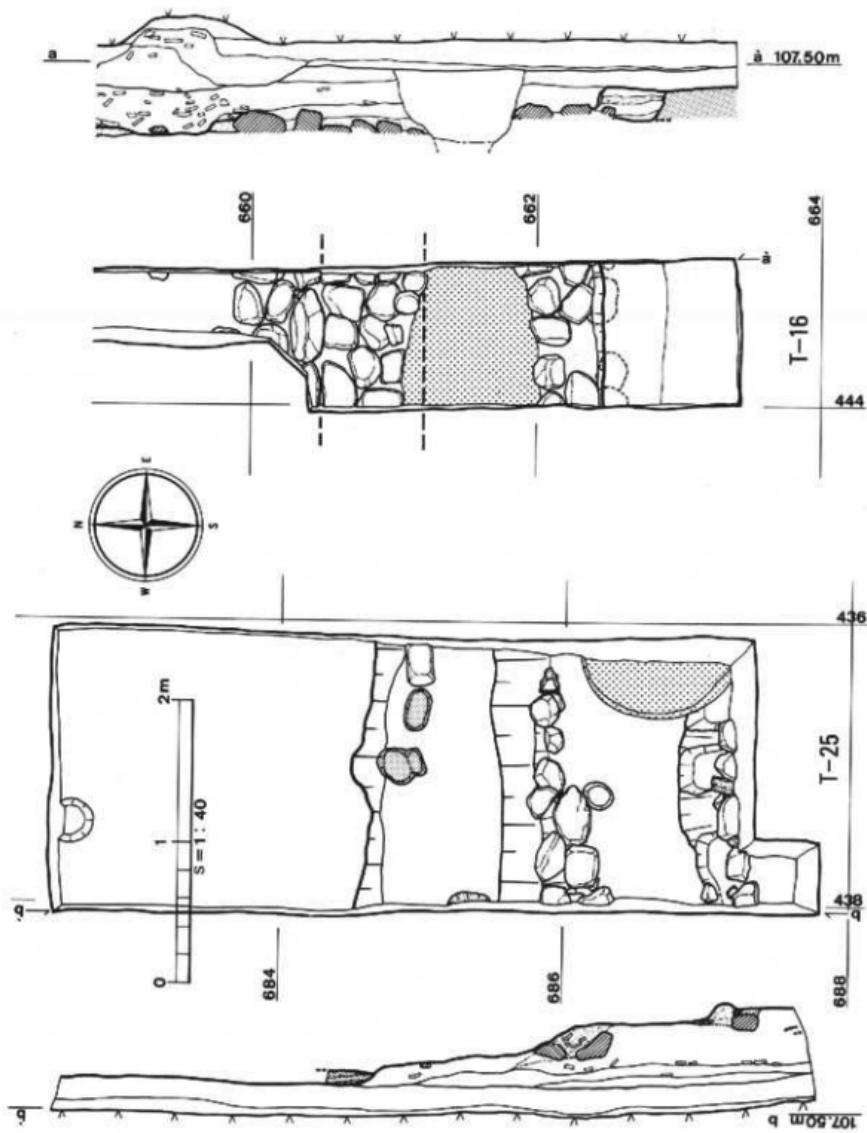


金 堂

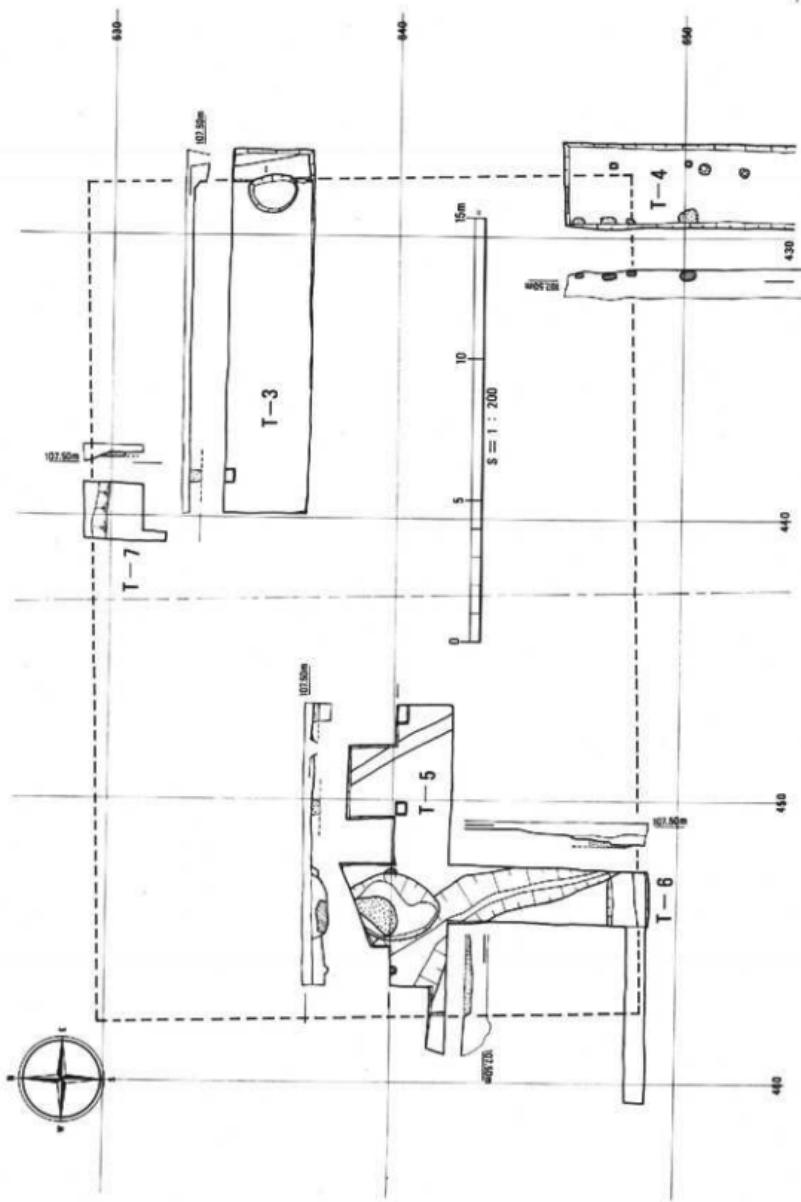
PLAN.4



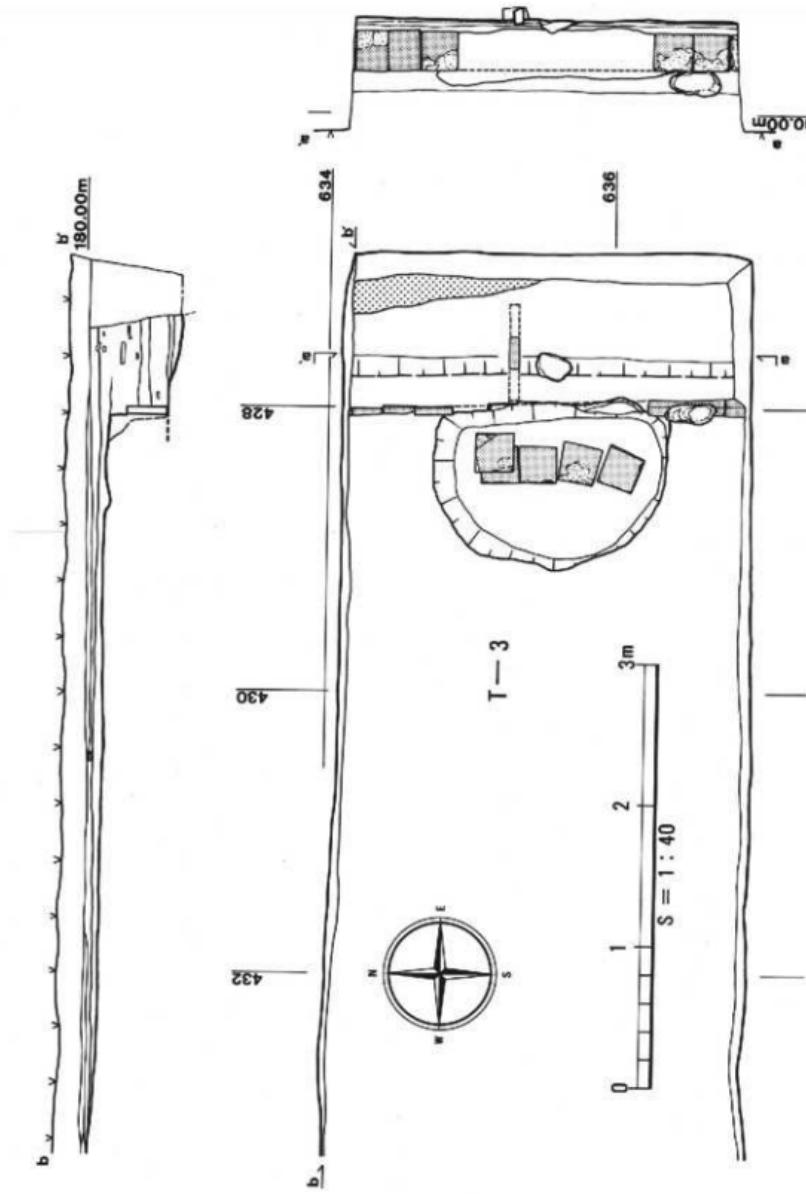
基壠東邊、北·東雨落溝、回廊入隅部



T-16基壇北辺 · T-25基壇南辺

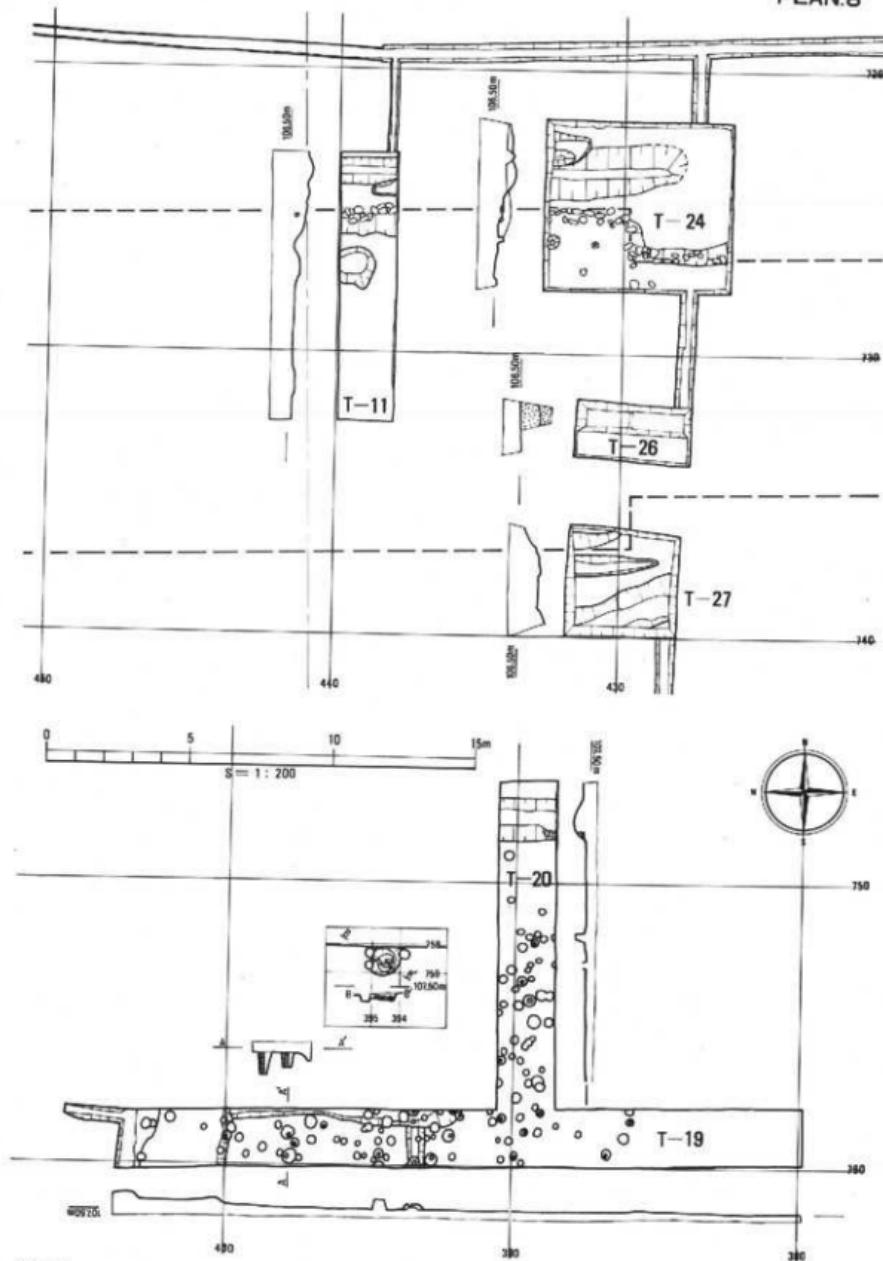


全体図



中門・中世柱穴群

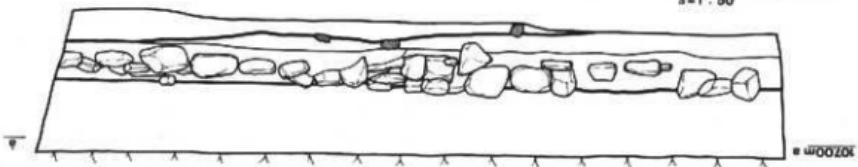
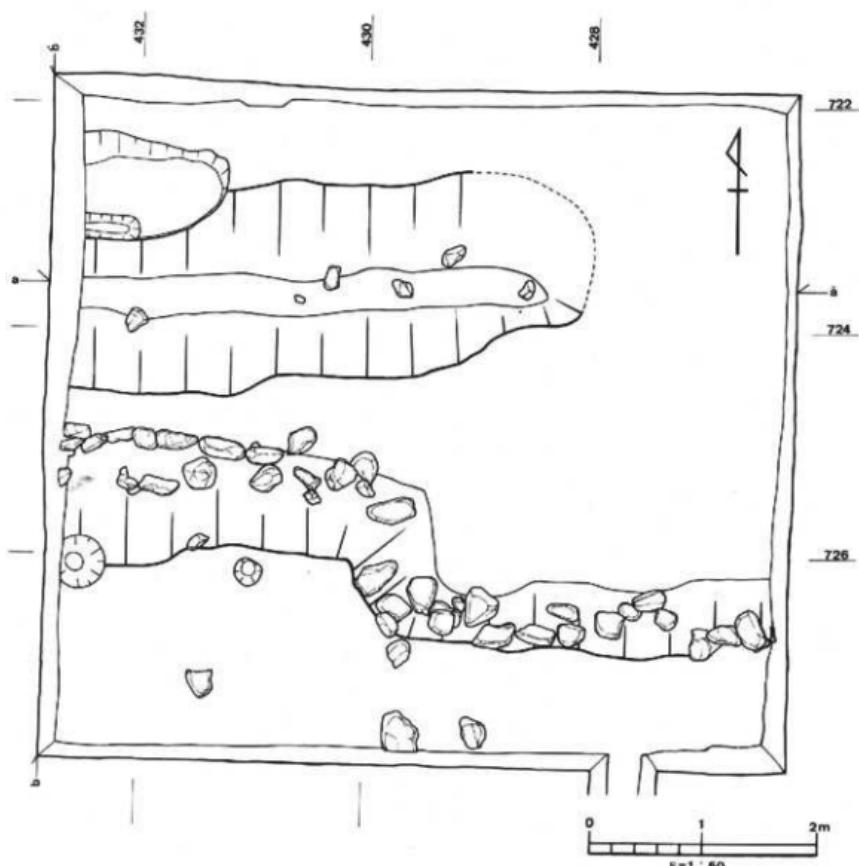
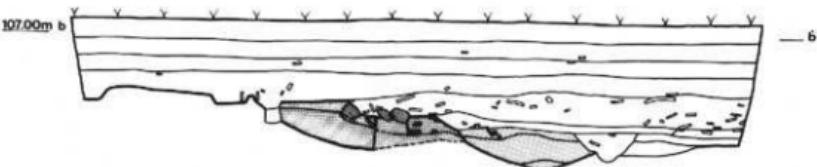
PLAN.8



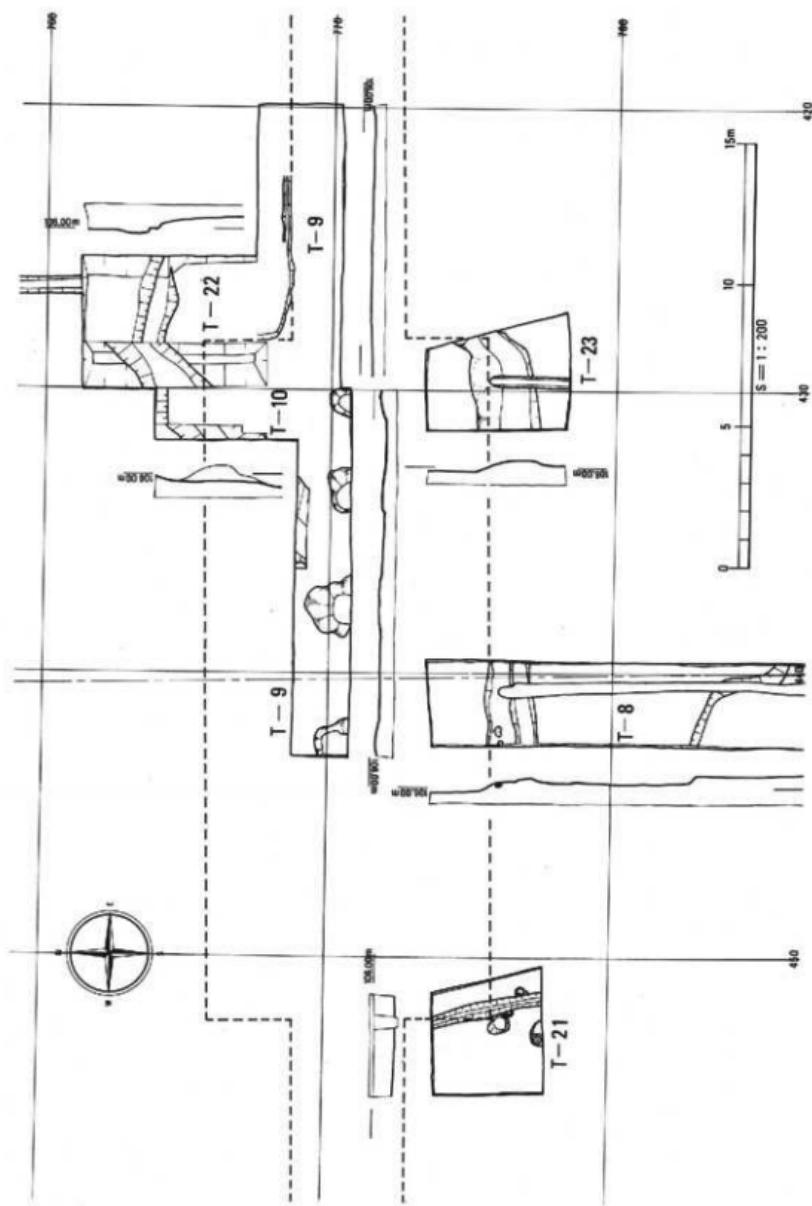
全体図

中門

PLAN.9



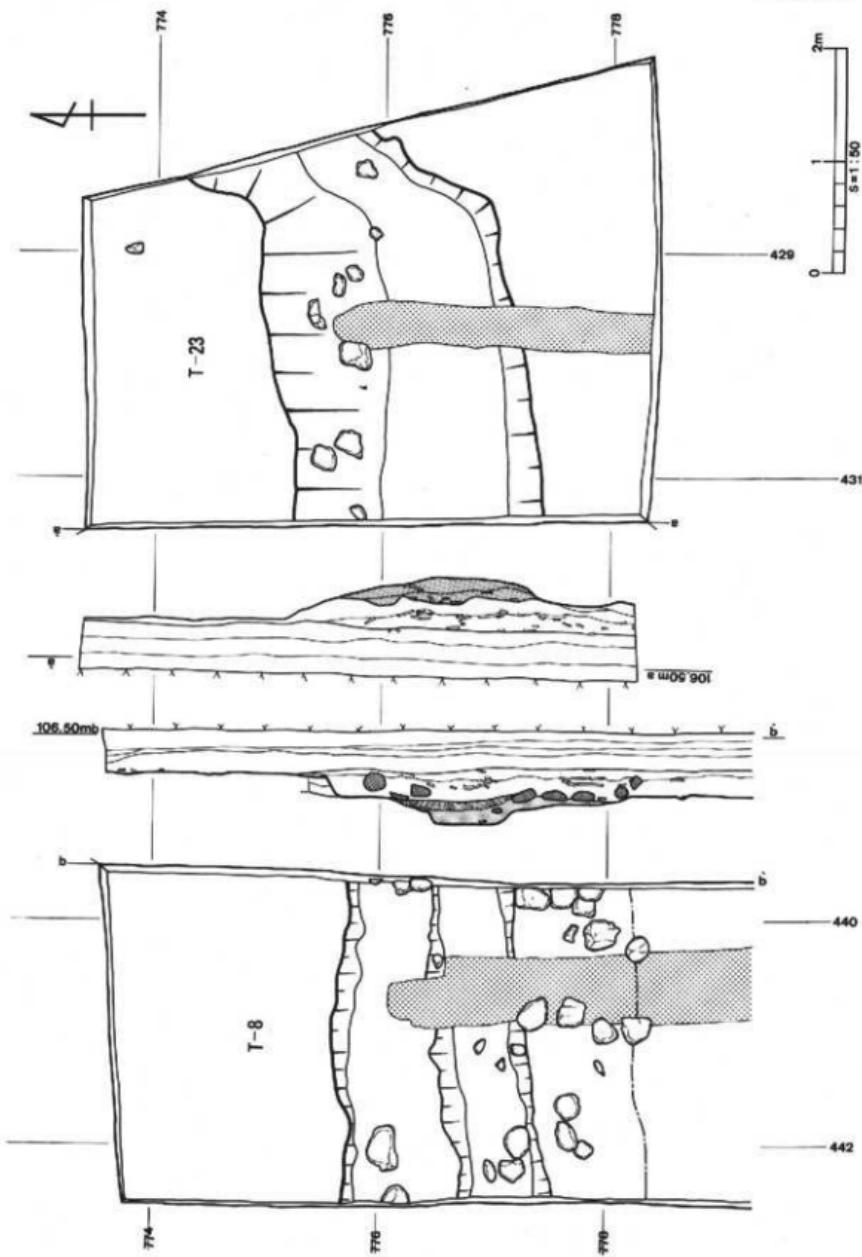
基壇東北隅と回廊入隅部(T-24)



全体図

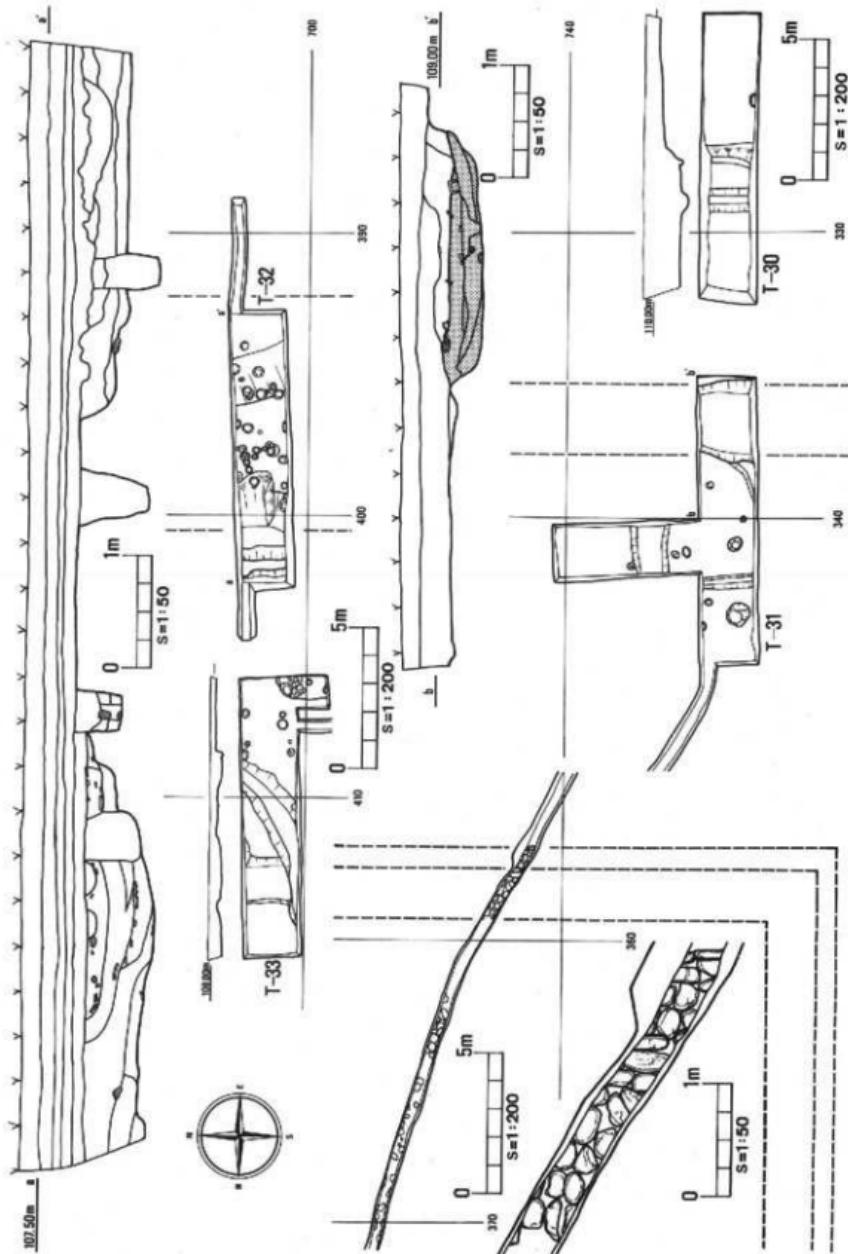
南門

PLAN. II



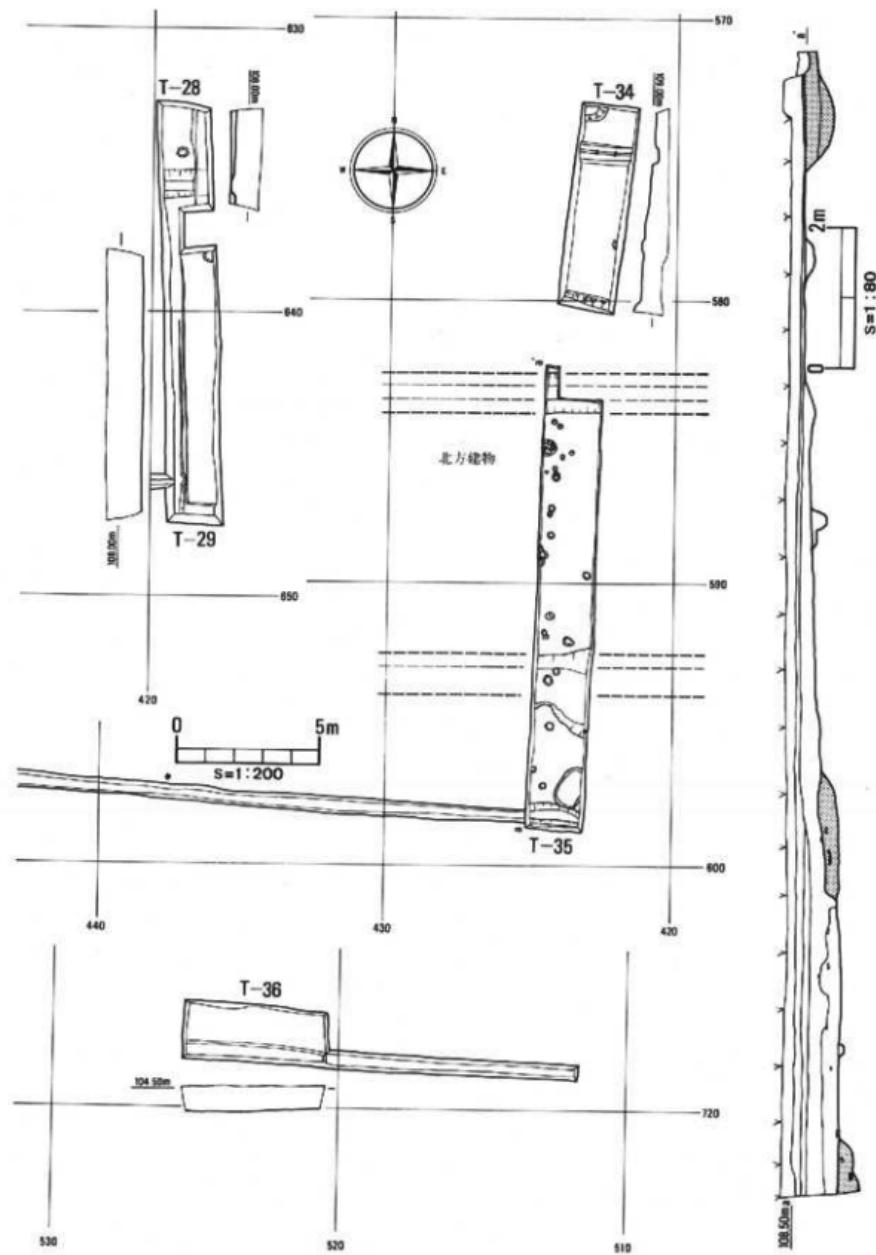
回廊・塔・寺域を画する溝

PLAN. 12



北方建物・その他

PLAN. 13





国分寺跡・国分尼寺跡周辺航空写真



国分寺跡航空写真



基壇東北隅(T-12・13. 北から)



1 北・東雨落溝(T-13、東から)

2 基壇東辺と回廊部(T-12、西から)



北雨落溝(T-17. 東から)



基壇北辺(T-16. 南から)



基壇南辺(T-18. 北から)



基壇南辺(T-25. 北から)



1 基壇東辺(T-3、東から)

6 基壇北辺(T-7、南から)



1 基壇西辺 (T-5. 東から)

2 基壇南辺 (T-6. 南から)



1 2

基壇東南隅(T-27、南から)

基壇東北隅と回廊入隅部(T-24、北から)



2



1 2

塔東雨落溝(T-31、西から)
東回廊基壇(T-32、北から)





1 基壇(T-9・10. 西から)

2 基壇東南隅(T-23. 南から)



1 南雨落溝(T-8、東から)

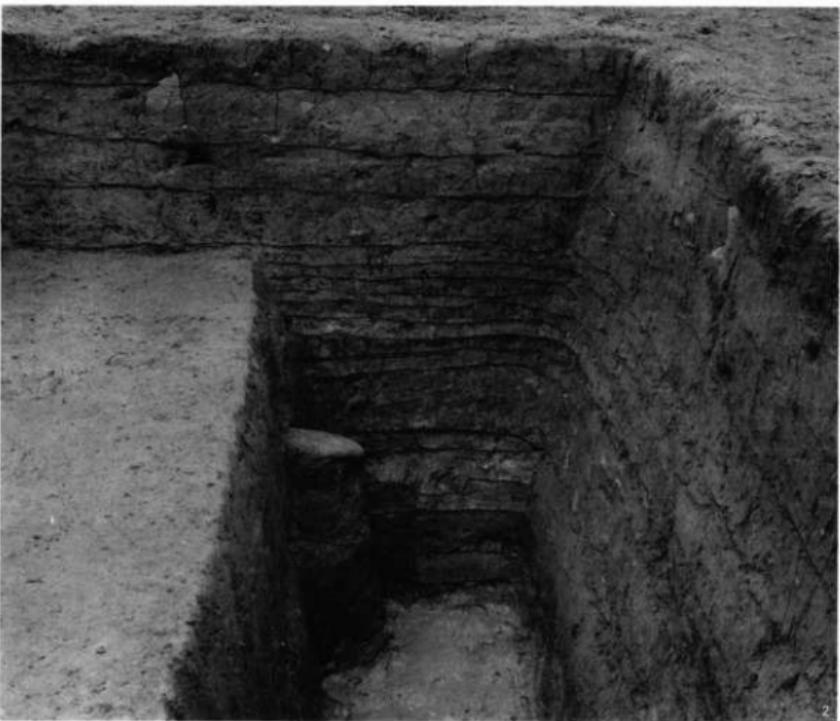
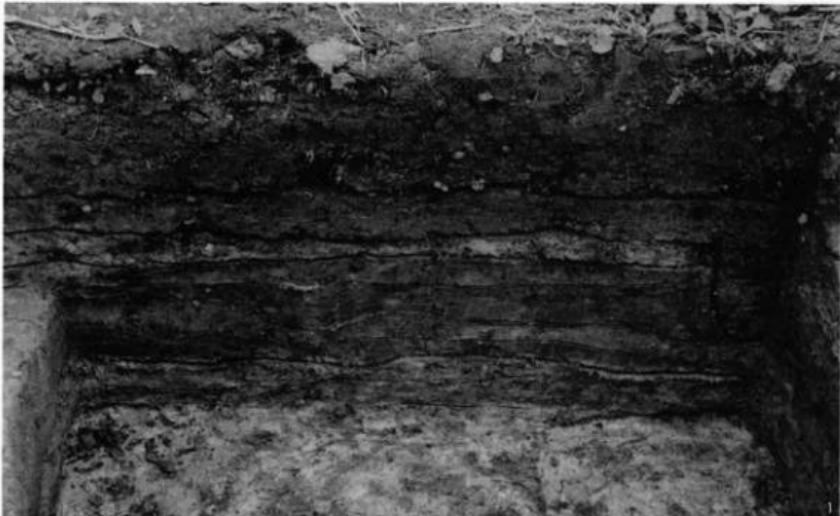
2 瓦出土状況(T-8)



1 北方建物(T-35、南から)

2 寺域を画する溝(T-32、西から)

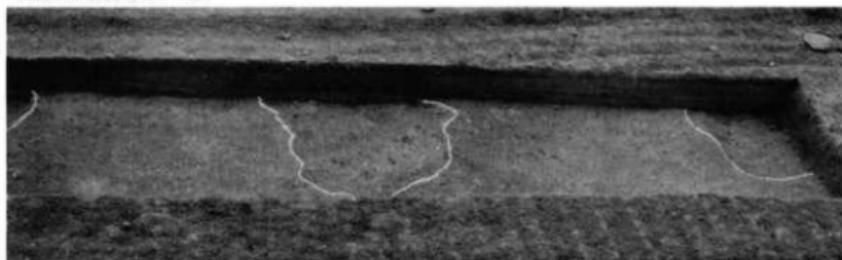
3 同溝土層断面(南から)



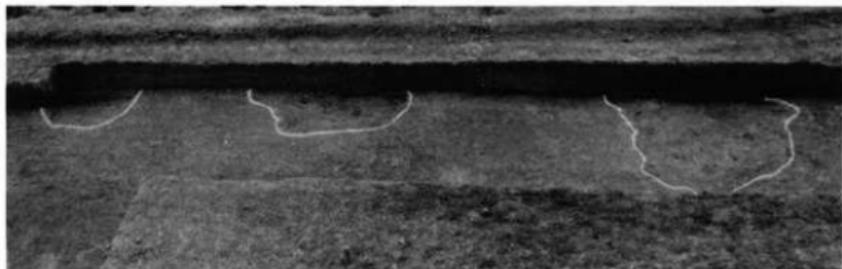
1 金堂(T-1. 北から) 2 中門(T-26. 東から)



金堂礎石抜取痕(T-12)



南門礎石抜取痕(T-9. 北から)



南門礎石抜取痕(T-9. 北から)



柱穴群(T-19. 東から)



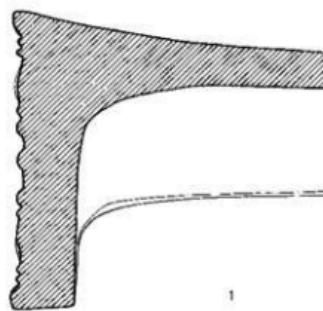
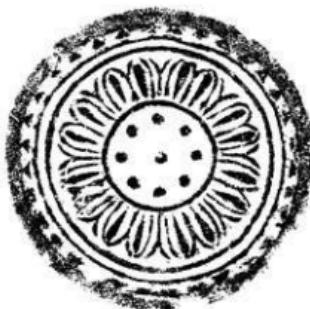
柱穴群(T-20. 北から)



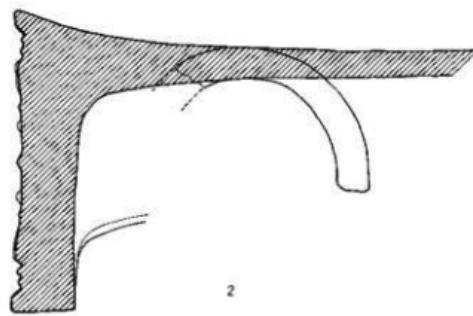
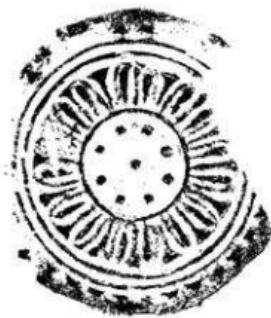
柱根(T-19)



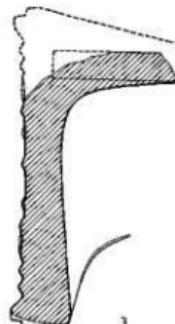
土壤(T-3)



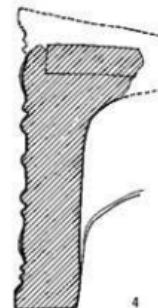
1



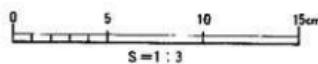
2



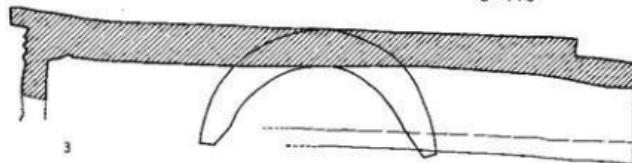
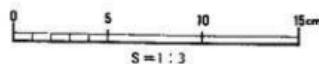
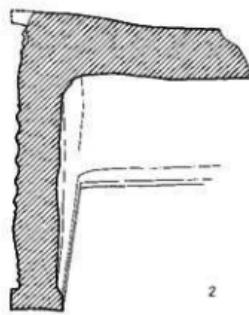
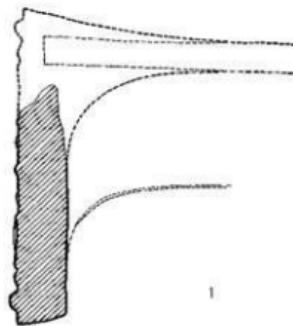
3



4



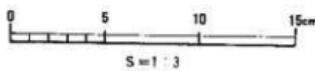
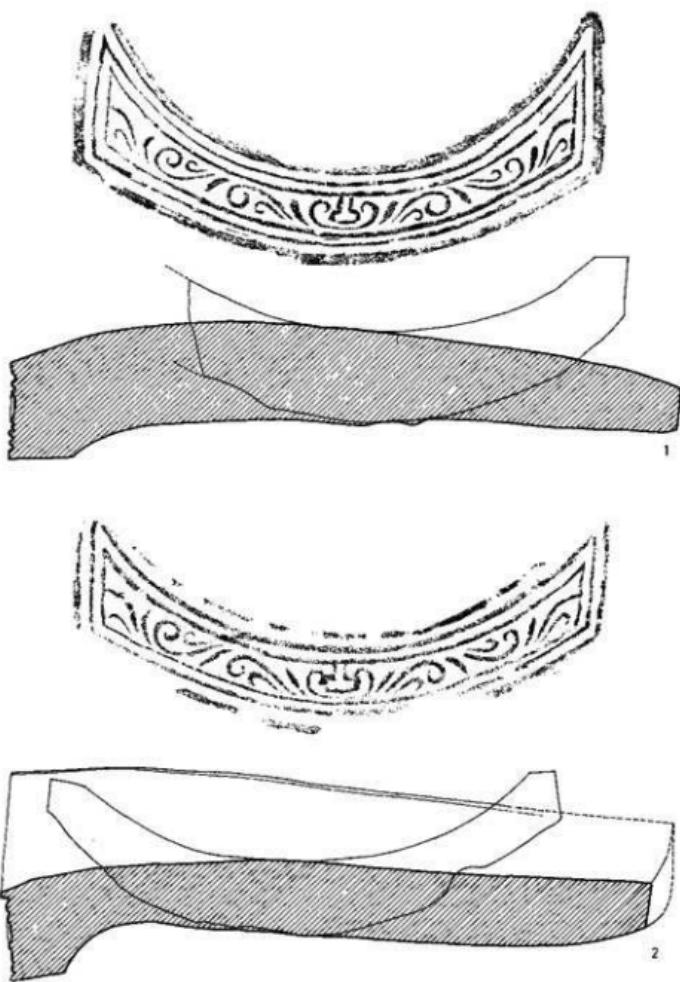
1 I-a 2 I-b 3 II-a 4 T-a



1 II-b

2 · 3 III

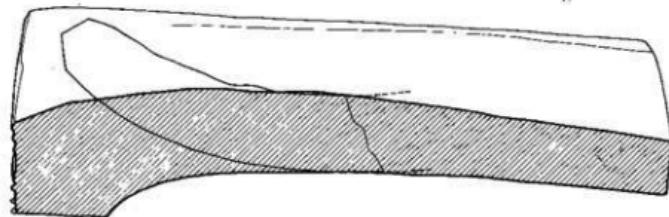
4 IV



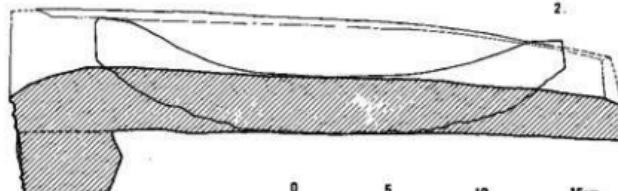
1 I-a 2 I-b



1.



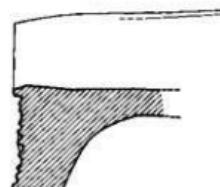
2.



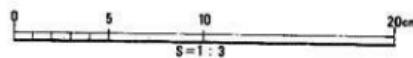
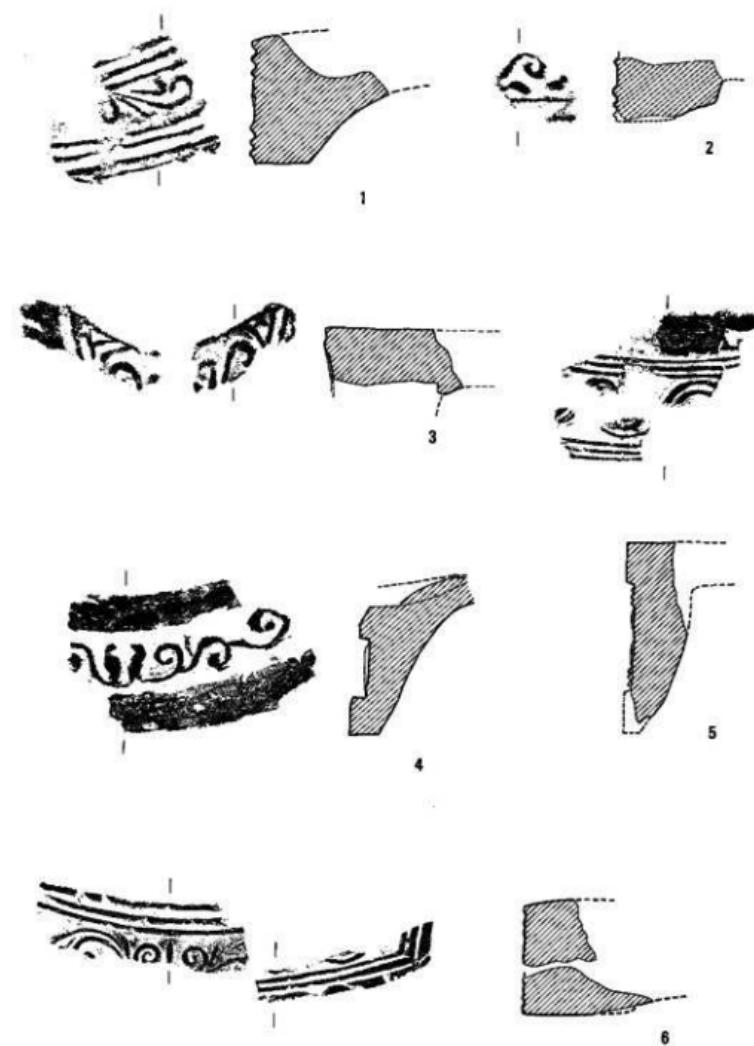
0 5 10 15cm
S = 1:3



3.



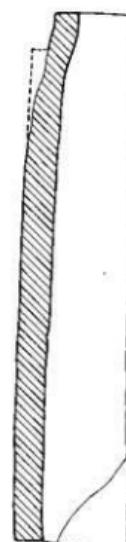
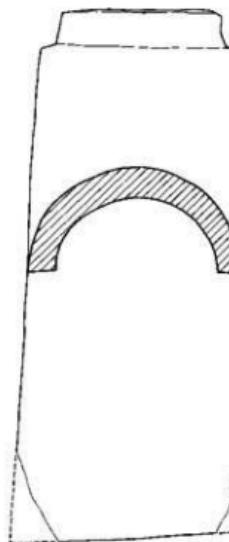
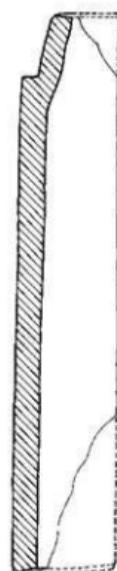
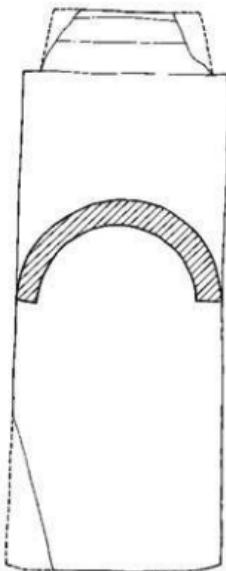
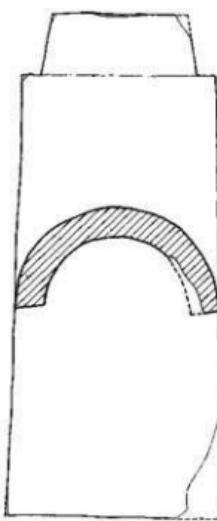
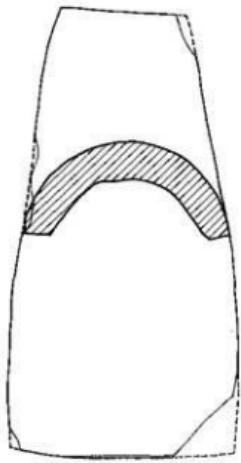
1 I-c 2 I-e 3 II



1 I-d 2 V 3 III 4 VI 5 VII 6 IV

軒丸瓦

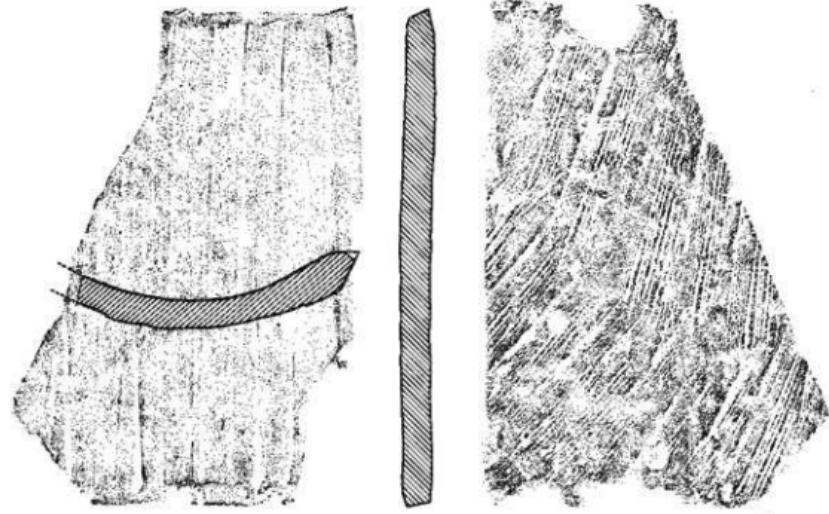
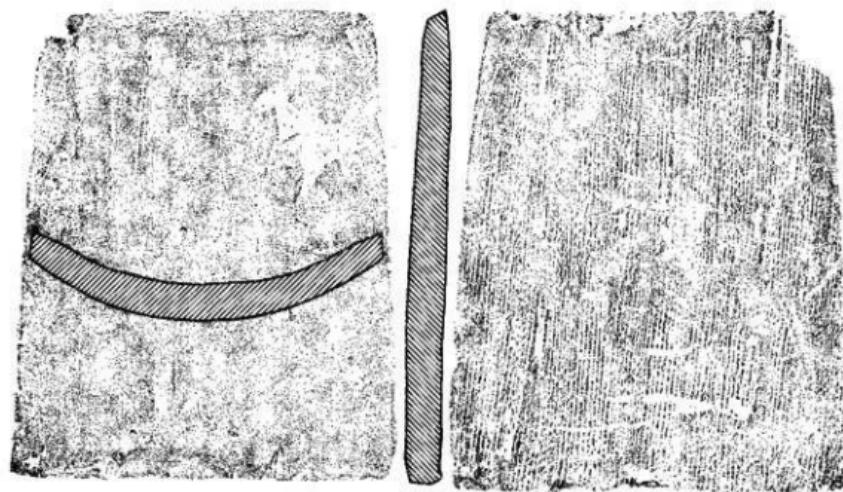
PL. 21



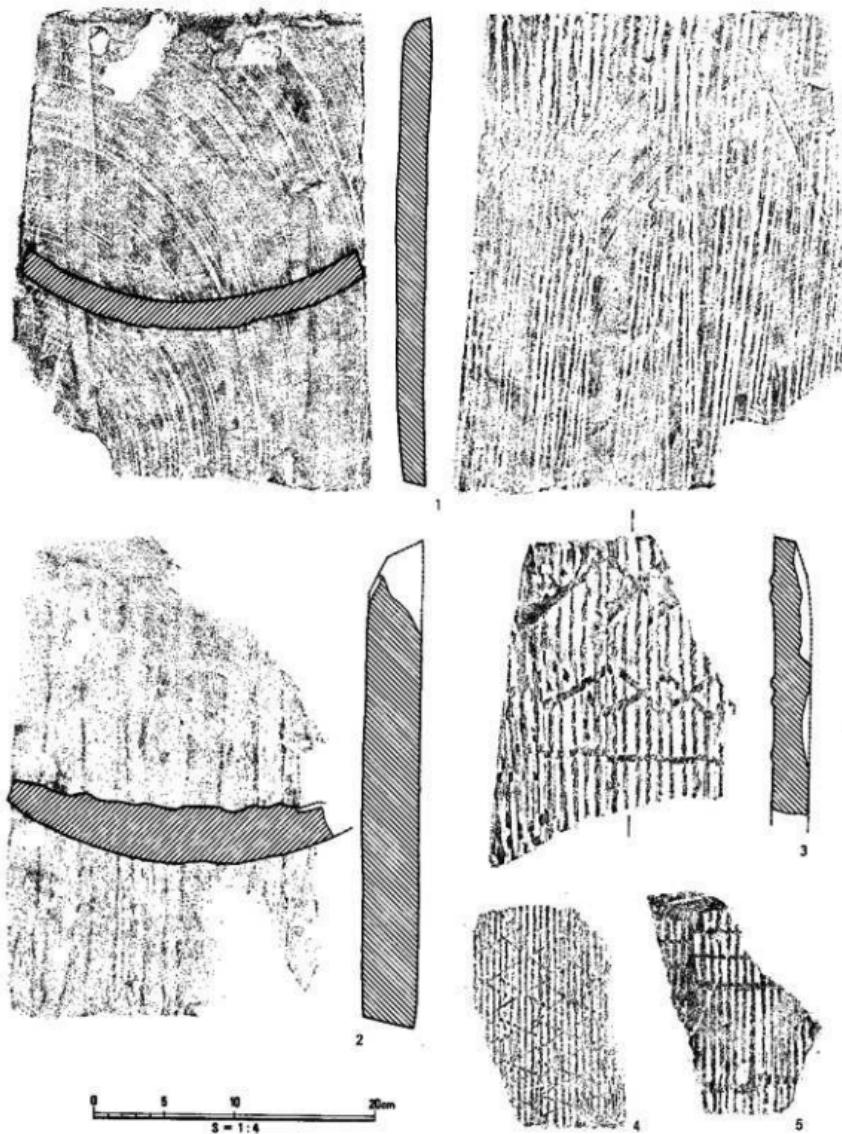
0 10 20 40cm

S=1:4

1 A 2 B 3 D 4 C

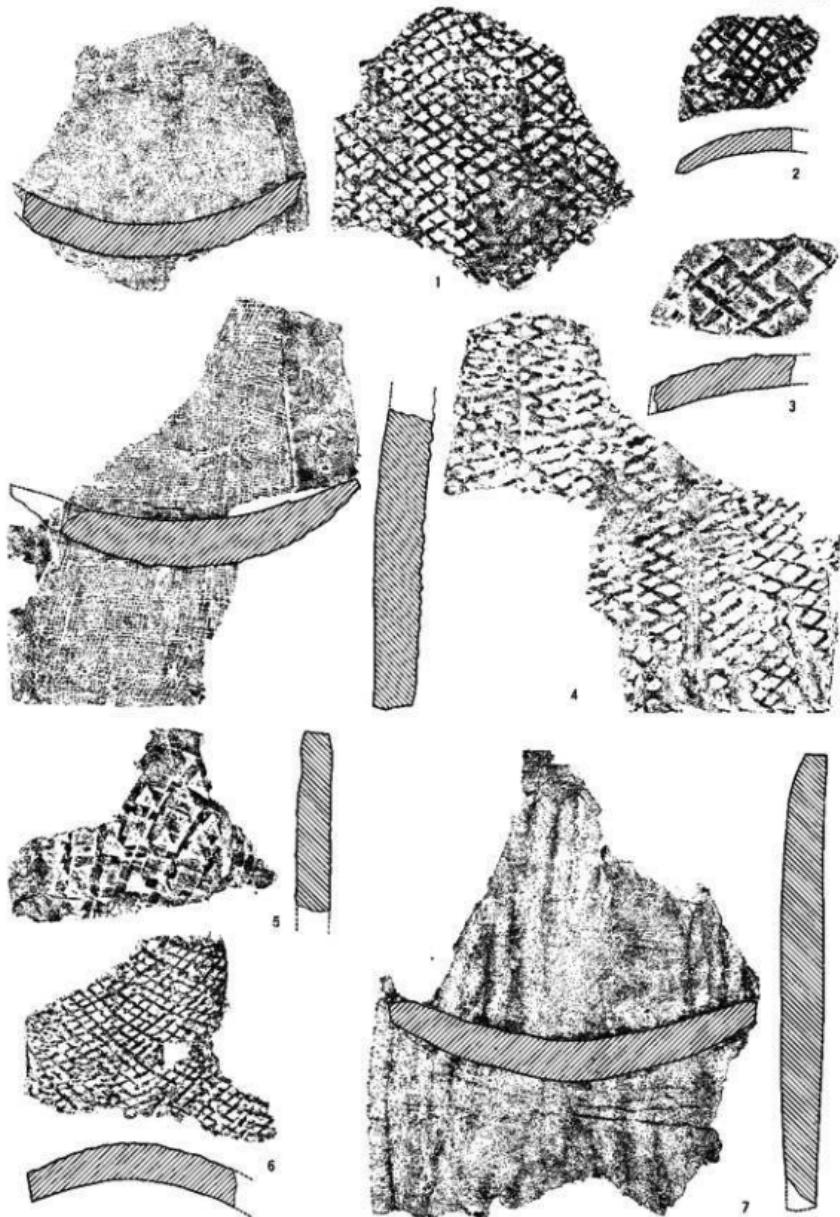


0 5 10 20cm
S = 1:4



平瓦

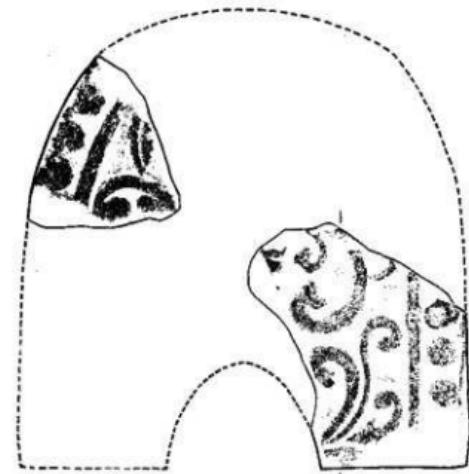
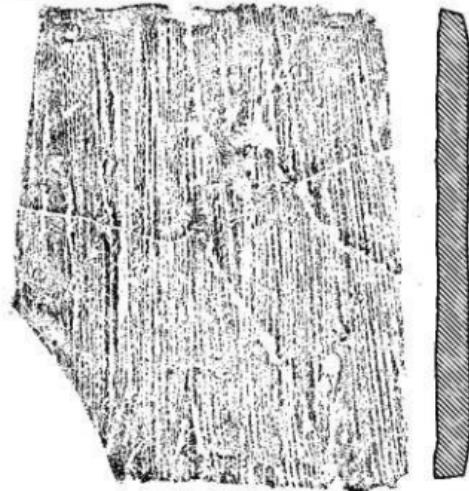
PL. 24



1~6 格子叩き目、7 無文

0 5 10 15
S=1:4

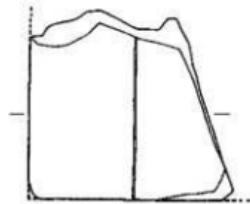
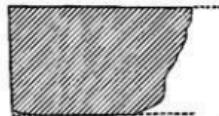
道具瓦・埴



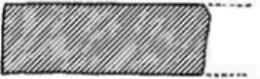
1

2

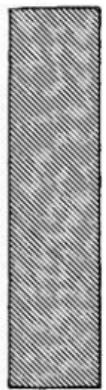
PL. 25



4



2



8

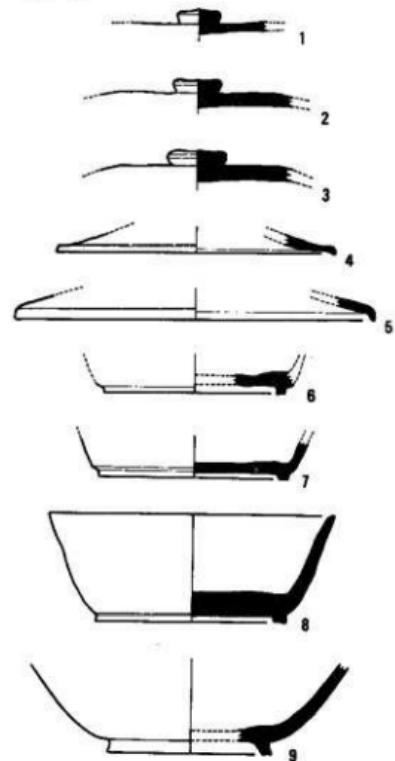
0 5 10 20cm
Scale: 1:4

1 隅切瓦

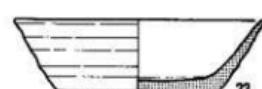
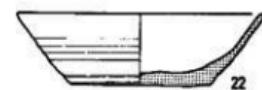
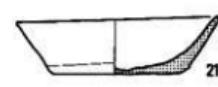
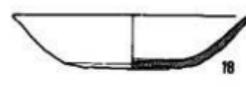
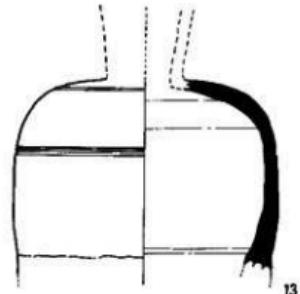
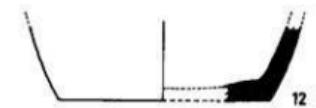
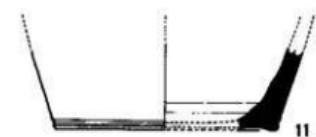
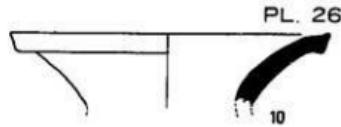
2 鬼瓦

3~6 塩

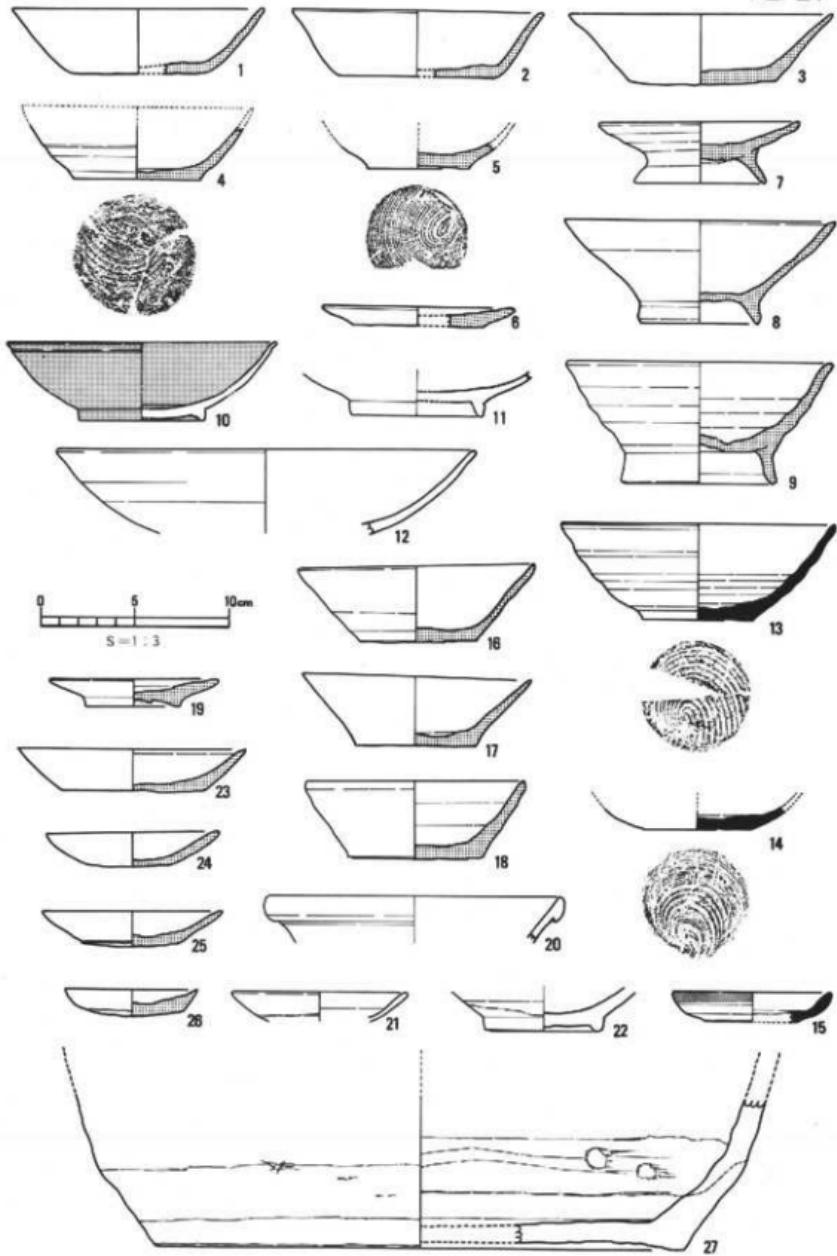
土 器



0 5 10 cm
S = 1 : 3



PL. 26





1 I-a

2 I-b

3 II-a

4 II-b

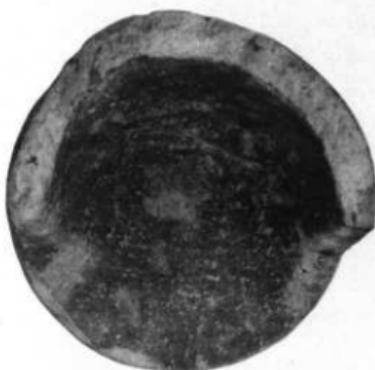
5 III

6 V

6



1



2



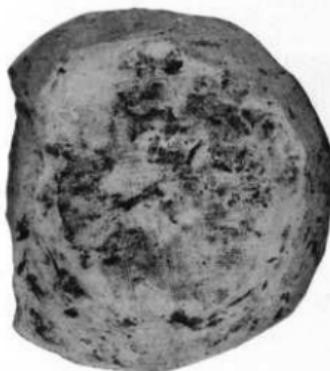
3



4



5



6

1 IV

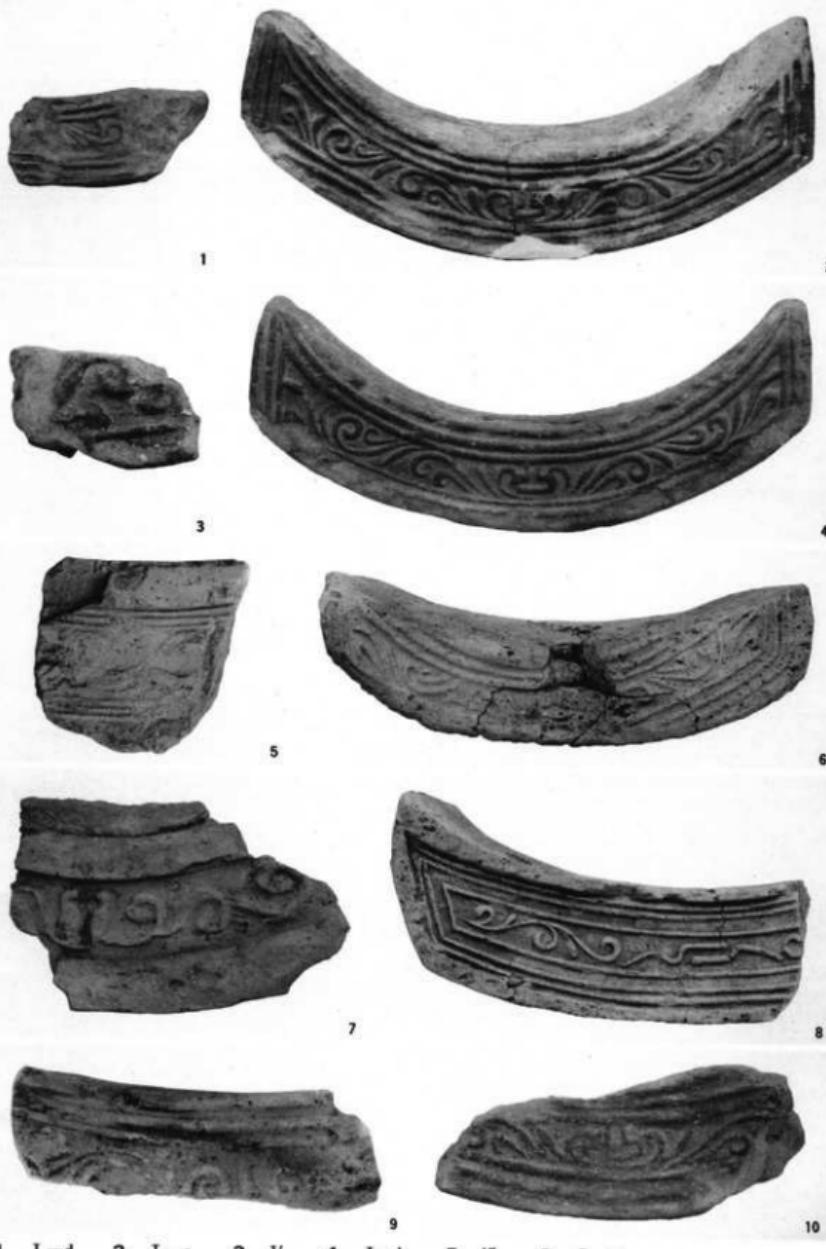
2 I-a

3 I-b

4 II-a

5 III

6 V



1 I-d 2 I-a 3 V 4 I-b 5 VI 6 I-e
7 VI 8 II 9 IV 10 I-c



1 I-a 2 I-e 3 II



A

B



D

3

C

4



1



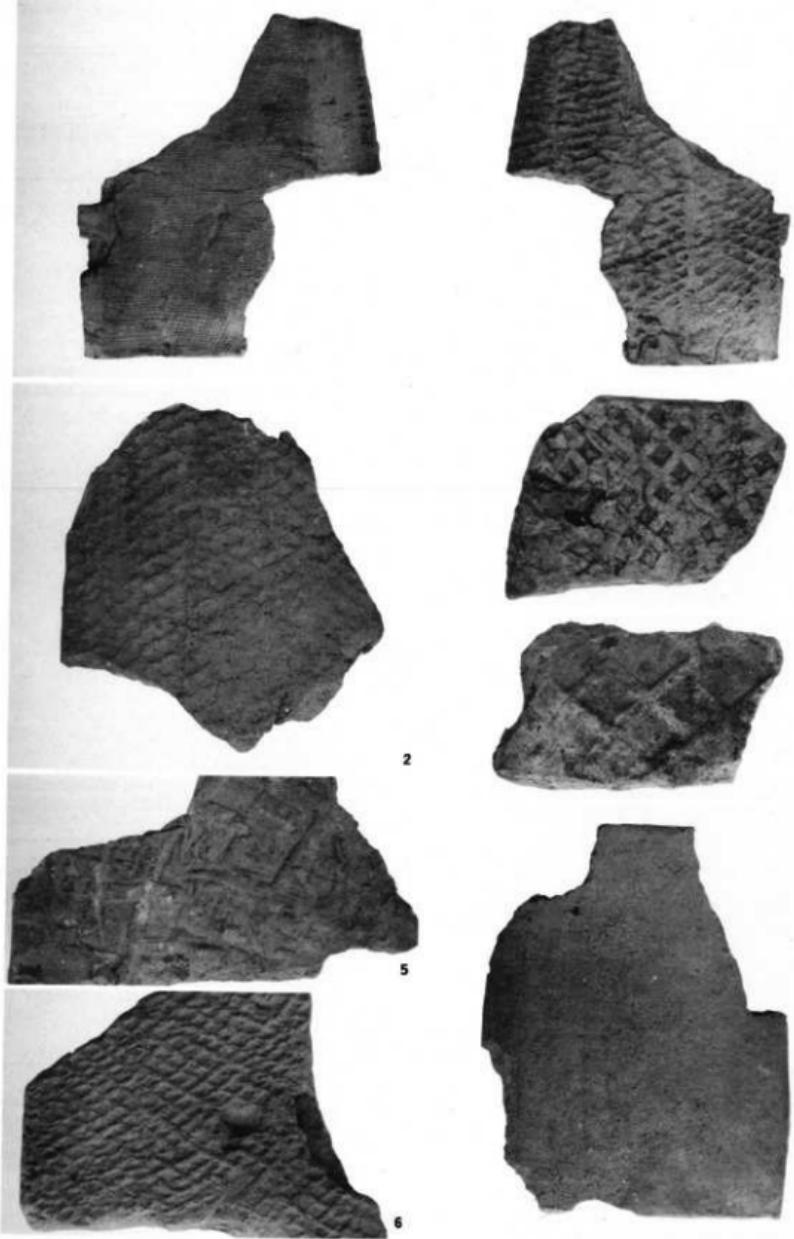
2



3



平行叩き目



1~6 格子叩き目 7 無文



2



4

1 開切瓦 2 鬼瓦 3~5 博



1



8



2



9



3



10



4



11



5



12



6



13



7



14

1 : 2.5



美作国分寺跡発掘調査報告

昭和55年3月31日発行

発行 津山市教育委員会
岡山県津山市山下97番地の1

印刷 有限会社 真陽社
京都市下京区油小路佐光寺上ル